
姉さま気質な居候？

矢枝真稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉さま気質な居候？

【Nコード】

N6207N

【作者名】

矢枝真稀

【あらすじ】

残暑続く九月の日曜日、ひとり暮らしをしていた主人公、つきしま・れん月島廉の元へやって来たのは実姉と・・・？

矢枝真稀が久々に書く、ベタ系ラブストーリー（？）です。

00::プロローグ（前書き）

久々連載のベタ系です。ご賞味下さい（笑）

00::プロローグ

「あづい・・・」

季節は初秋を迎えたというのに、まだ残暑の厳しい九月の始め。

扇風機にへばり付きながら“暑い”を連発する青年が、この物語の主人公である。

青年の名は、月島廉^{つきしま・れん}。現在17歳の、高校2年生である。身体的特徴は、他の高校生となんら変わらず、学業成績も中の上もしくは上の下。唯一の特徴を挙げるならば、少し(?)だけ顔立ちが女性っぽかった。

その顔のおかげ(?)で、他の男子学生よりは女の子の友達が多いものの、友達以上に進展する事は無く、未だ年齢〓彼女いない歴でもあった。

実家暮らしの彼だが、母親は幼い頃に病気で他界し、父親は貿易商という職業柄、世界各地を飛び回っている為に、帰って来るのも数年に一度。最後に会ったのは、彼が中学を卒業した時だった。

そして唯一、彼の保護者代わりだった四つ歳の離れた姉も、専門学校卒業後に家を出た。現在は市街地から少し離れた場所で、祖父母の経営していた喫茶店のマスターとして、後を継ぎ頑張っている。

余談ではあるが、彼の祖父母は現役を引退し、現在はワゴン車一台の日本一周旅行の最中である。

話は逸れたが、それ故に彼は実家でひとり暮し中なのである。

「あゝづゝいゝ」

本日何度目の“暑い”発言か。扇風機の前で微動だにしない彼の耳に、

ピンポーン

インターホンの呼び出し音が届いた。

「はいはい」

けだる気に玄関に向かう彼。扉を開けた先には、見馴れた姉の姿と、見知らぬ女性が立っていた。

00::プロローグ（後書き）

結構前に考えた作品ですが、何となく不安要素がいっぱい・・・。
不定期更新ですが、必ず完結させるので、温かい気持ちで見守って
下さい！

01..居候って？

「どうぞ」

姉とその“お友達”と頭の中で解釈した彼は、二人をリビングへ招き、麦茶を差し出した。

「ありがとう！」

「すまないな」

と、二人の反応が返って来る。姉の対面に座り直した彼だが、ふと疑問が浮かんでいた。

「それより急にどうしたの？まさか友達を連れて遊びに来たって訳じゃないよね」

彼の問いに、姉はコップに付けた唇を離す。

「そうね・・・とりあえず紹介するわ」

と、姉の隣に座る女性を紹介し始めた。

「彼女は高校の頃からの友達で、かりや・みずほ狩谷瑞穂」

「よろしく」

「あ、どうも・・・」

「んで、単刀直入に言うけど・・・今日から、この家で暮らす事になったから!!」

そう高らかに宣言した姉。対して彼は、このあまりに突飛な話に

「・・・は？」

と、間拔けな声を出した。いや、いきなりこんな事を言われたら、誰でもこんな反応をしてしまうのだろうか。

「えっと・・・誰が？」

「瑞穂が」

「私が」

“はい”と、挙手する狩谷と、狩谷を指差す彼の姉。そんな突拍子もない事をいきなり言われて“はいそうですか”と納得するわけもなく・・・

「ち、ちょっと待って！いきなりそんな事言われても・・・」

と、あたふたとする廉。

「あ、てことは姉さんも一緒・・・だよね？」

さすがに見ず知らずの女性と二人で暮らすという非常識な事は言わないだろうと、半ば軽い気持ちで尋ねた廉だが、

「アタシは店があるから無理！」

非常識な姉だった。

「姉さん！いきなりそんな事言われて納得できるわけないじゃないですか！！第一、狩谷さんだって・・・」

「いや、私は別に構わないが」

似た者同士だった。

「んじゃ、話も纏まった事だし、アタシは店の仕込みあるから！」
「え、ち、ちよつと姉さ・・・」

ボタン！

姉、退場。

残された廉と狩谷の二人の間に、シーンとした静けさが漂う。気ま
ずそうな廉とは対照的に、狩谷はのほほんと麦茶に口を付けた。

たった数分間の静けさだったが、廉にはとても長く感じられた。ほ
んの少し前に姉のgori押しで狩谷の居候が決まったのだが、どう接
すれば良いのかわからない。まして姉と同じ年なら、話題すら出て
来ない。

そんな静寂を破ったのは、狩谷だった。

「なあ？」

「は、はい？」

「少年は、料理は出来るかね？」

「はあ、一応は」

“少年”と呼ばれた事よりも、なんとも変な質問に、強張った表情は緩み、間拔けな声を出した廉。

「そうか・・・フム」

「あのー、狩谷さんはどうして家に来る事になったんですか？」

そう、廉は肝心な事を聞いていなかったのだ。そもその経緯を、彼は質問にして聞いてみた。

「ああ、そういうば言ってなかったな」

ふむ、とひと呼吸いれた狩谷は、順を追って話し始めた。

1・職場から近い物件を探そうと不動産屋へ行く

2・自分の条件を不動産に提示した。（家政婦さん付きで、月々の家賃が五万円以下の借家）

3・そんな物件は無い、と追い出される。仕方なく他の不動産屋へ行くが、同様に見つからなかった。

4・諦めて家（実家）へ帰る途中に廉の姉に会い、事の経緯を話す。

5・現在に至る。

「とまあ、こんな感じだな」

「てことは、俺は家政婦・・・」

「ああ、心配するな。家賃はきっちり払う」

何が“心配するな”なのだろうかと不安になる廉だった。

01..居候って？（後書き）

久々に書き始めた訳ですが、相変わらず文章が拙いです。ごめんなさい。

ですがまだまだ始まったばかり、頑張ります。

02…家政婦男子誕生？

なんだろう、上手く丸め込まれた気がする。と、廉は思った。事実、狩谷はこの家で暮らす事になんの躊躇いも無いようで、廉の作ったオムライスをガツガツと胃袋へ運んでいる最中だ。狩谷が家に来て1時間、遅めの昼食を作るべくキッチンへ向かうと、意味無く狩谷もついて来た。

「手伝おう！」

廉のサポートをかってでた狩谷。廉も素直に厚意に甘えた・・・はずだった。

ガチャン！

「・・・・・・・・」

ボンッ！！

「・・・」

パリーン！！！！

「えーっと・・・と、とりあえず座って待ってて下さい」

「・・・すまない」

廉とて、難しい事を頼んだつもりはなかった。最初は卵を割ってもらおうと頼み、卵は加減無しで、ガラス製のボウルもろとも大破。次に頼んだのは、フライパンに油をひいて、温める……………

最初に上手く点火出来なかった事を忘れ、油をフライパンへ投入。そこで火がついてないことに気付き、再び点火Ⅱ爆発音。多少壁を焦がした程度で済んだ。

そして最後に、食器棚から皿を出してもらおうとお願いし、皿を手にとった狩谷。ここまでは良かったのだが・・・・皿は狩谷の手を離れ、無情にも・・・・埋め立てゴミと化した。

一通り頭の中で回想した廉は、一つの結論を出していた。

“家事は任せられない”

と。

また、彼の性格上、こんな不器用な人間がひとり暮らしをすれば、少なからず被害が出る事は目に見えていたし、単に言えばほっとけなかったのも事実である。他人と一つ屋根の下で生活するという事に躊躇いはあるものの、それ以外は対して気にはなくなっていた。

「味、どうですか？」

「ふゆまひ（美味い）！！」

食欲を満たそうと手の動きを止めない狩谷の返答に、安堵する廉。とりあえず彼が得た狩谷の情報は、名前と歳と家事が出来ない、という事だけ。ま、後の事は追いついていこうと思った。

「ご馳走様。美味かった!」

「お粗末様でした」

麦茶を差し出しながら、視線を狩谷に向けた廉。

切れ長の双眸に違わぬ顔立ちは、“可愛い”というよりも“かつこいい”という表現が合うな。なんて呑気に思った廉は、訝し気に自分を見ていた狩谷と目が合った。

「私の顔に何か付いてるか？」

「あ、いやあかつこいいなと・・・」

「それは褒めてるのか？出来れば可愛いと言って欲しかったのだがな」

「ア、アハハハ・・・」

本気とも冗談ともとれる返答に、廉は苦笑いするしかなかった。

とりあえず、廉と狩谷は今後の事を話し合い、現在は使われていない姉の部屋を提供する事に。料理と掃除は廉の仕事となったのだが、洗濯に関しては“自分の物は自分で洗う”という廉の提案に、渋々了承した狩谷。さすがに他人（しかも女性）の衣服を洗濯するのは抵抗がある!と、何とか説き伏せた廉に対し、

「別に私は気にしないんだが・・・」

狩谷は羞恥心をどこかへ忘れてきたようだ。

P M 3 .. 0 0

“元姉の部屋”へ狩谷を案内し、対面する自分の部屋へ体を向けた廉。扉を開けて足を一步踏み込んだ時

「なあなあ少年、この部屋は？」

と、指差す先には“立入禁止”の立て札が下がった扉。

「ああ、俺の趣味の部屋です・・・決して、扉を開けないでくださいね」

と、ニコリと笑顔を見せた廉だが、取り巻く空気がいびつで刺々し

い。そんな返答に狩谷は

「なんだ見られたら月にでも帰ってしまうのか？」

とボケた。

「うゝむ・・・月に帰られると困るしな、わかった。約束しよう！」

普通なら変な勘繰りをしてしまうが、追求をしないのが、狩谷瑞穂である。“りょーかい”と一言追加し、自分に宛がわれた部屋の中へと消えて行った。

廉も狩谷が部屋へ入ったのを確認し、自室へ入ったのだが、

「少年っ！今日の夕飯はなんだっ!？」

数秒後にはノック無しに部屋に乱入され、5分後には二人で買い出しに向かうのだった。

03…今日の夕飯は？

月島宅から徒歩10分、二人がたどり着いたのは一軒のスーパーマーケット。廉は食料の買い出しには、必ずこの店と決めているのだが、狩谷は初来店。辺りをキョロキョロと窺っている。

「夕飯は何が食べたいですか？」

「んゝゝゝ肉、かな」

肉料理と言われても、色んな種類がある。トンカツ・すき焼き・ステーキ・・・etc。

「うん、焼き肉！焼き肉がいい！！」

“焼き肉って料理なんだろうか？”など考えながら精肉コーナーを物色。すると店員がコーナーの前で何かの準備をしている。

「あ、そうかつ！！！！」

「ど、どうした？」

あまりに大きな声を出した廉に、少しビビる狩谷。そして気付いた。いつの間に群がった主婦達と、廉の表情に。

“少年の目付きが、変わった！？”

直感が、そう理解した。事実、廉の柔らかな表情は一変し、目付きはまるで獲物を仕留めにかかるハンターのように、鋭利に尖っていた。

「狩谷さん、霜降りと赤身のお肉、どちらがいいですか？」

「ど、どちらでも・・・好き、です」

廉の取り巻く空気に気圧されながらも返答する狩谷。“あ、危ないから下がって下さいね”と付け加えた廉は、主婦連中のワキを摺り抜け、二つ列んだワゴンの間に陣取った。

ただならぬ雰囲気の後ずさる狩谷はその数分後、まるで戦場と化した精肉コーナーで、阿修羅の如き形相で肉を取り合う主婦達と、涼やかな表情でありながら、決して無駄のない動きで次々と肉を買い物カゴへ入れる廉の姿を目撃することになる・・・。

3分後。

「こんなもんかな？」

と、廉はまずまずといった顔をしている。手には、およそ二人では食べきれない程の量の牛肉のパックが、ギッシリとカゴに詰め込まれていた。

「さてと・・・次は何を買いましょうか？」

ニツコリと笑みを浮かべた廉に対し、狩谷はというと・・・

「う、うーむ・・・」

“味方なら心強いが・・・敵に回したくないな”

と、少なからず恐怖を感じていた。

その後は適当に食料を物色し、何故だか甘い物を狩谷が廉にねだる、という図が展開。そんなわけで、大量のプリンを追加し、いざ精算。

「四千八百二十三円です！」

買い物カゴいっぱい食料を詰め込んだはずなのに、値段は意外とリーズナブル。

「五千円からですね！」

にこやかな店員のスマイルをスルーした廉と、意外な安さにびっくりした狩谷。精算を済ませ、持参したエコバッグへ慣れた手つきで商品を詰め込む廉を、狩谷は感心しつつ、眺めていた。

店を出た廉と狩谷が家に帰り着いた時、時刻は4時を過ぎていた。

「狩谷さん、夕飯は何時頃にしますか？」

商品を冷蔵庫に仕舞いながら、廉はそれとなく狩谷に尋ねる。

「ん、そうだな・・・7時頃でいい。それとだな・・・」

ソファで寛ぐ狩谷だが、先程から妙な違和感を感じていたのだ。

「狩谷さんと呼ばれるのは、他人行儀であまり好きじゃない・・・
そうだな、瑞穂か瑞穂ちゃんと呼んでくれ」

「まさかの二択!？」

廉がツツコミ役として誕生した瞬間だった。

「んじゃ・・・“瑞穂さん”で」

「仕方ない、妥協してやろう」

口では納得していない狩谷・・・瑞穂だが、表情は先程よりも、随分と嬉しそうだった。

「じゃあ、俺の事は・・・」

「少年は“少年”だ。そのほうがしっくりくる」

呼び方を変えてもらえなかった為か、内心“理不尽じゃね？”と思う廉・・・いや、少年だった。

04：朝の一幕

「瑞穂さ〜ん、朝ですよ〜！」

・
・
・
・
・
・
・

「瑞穂さ〜ん！」

・
・
・
・
・
・
・

「会社じゃないんですか〜？」

・
・
・

「参ったな、朝ごはん食べてもらいた「おはよう少年！今日はいい朝だな！！ん、どうして顔を逸らす・・・ああ、これか」」

扉を勢いよく開けた瑞穂は、瞬時に顔を背けた廉に疑問を投げかけ、自分の姿を見て納得。

「目の保養になったかね？」

「さ、さっさと着替えて下さいっ！！」

耳まで真っ赤になった廉は、ギクシャクしながらリビングへ戻って行った。

「ふーむ、少し刺激が強かったかね・・・」

と、下着姿の瑞穂は悪戯っ子の笑みを浮かべた。

着替えを済ませた瑞穂がリビングへ向かうと、既に二人分の朝食が並び、学生服姿の廉が、ぎこちなく座っていた。

「おや、待っててくれたのか。すまん」

「い、い……え？」

瑞穂の姿を見た廉は、疑問系で硬直。目の前にいたのは、昨日のラフなTシャツ姿でも、つい先程見てしまった下着姿でもなく、黒スーツにパンツスタイル、赤ぶちメガネのインテリ美女姿だった。

「ん？ なにかおかしいか？」

「……瑞穂さん？」

「なんだ？ ハハーン、さては惚れたな！？」

冗談のつもりだったのだろうが、予想に反して廉は口をパクパクさせていた。

「なんだ、反応がつまらん。それより、朝飯食べていいか？」

「あ、ど、どうぞっ！」

ようやく我に返った廉の返答を聞き、準備された朝食に箸を付ける。

「んん、んまい!!」

感嘆の声を出した瑞穂に対し、安堵の表情を見せた廉だが、昨夜の化け物のような食欲を見せた彼女に、若干の不安を残していた。

というのも、昨夜は歓迎会をかねての焼き肉パーティーをしようと考えた廉は、特売セールで国産牛肉を確保。総重量約2キロと大量に買い占めて“余ったら姉にでも分けてやるか”などと呑気に考えていた。

しかしながら、あの大量の焼き肉は、一夜にして消滅。というのも、あの細身の瑞穂が、まさかの1.5キロを胃の中へ。廉とて500グラムを処理したのだが、代償として胸やけを起こした。しかも、食後にプリンを5個食するという化け物じみた事をやってのけた瑞穂に対し、

“ 今月は、食費だけでいくら遣うのだろうか ”

と、内心不安になっていた。

「ふう・・・美味かったが、少し物足らんな」

「 と思って、お代わりの準備も出来てます 」

昨夜の事を知っているからこそ、順応な廉の対応に、瑞穂は口角を少し吊り上げた。

「 それじゃ、お言葉に甘えて・・・ 」

結局、朝食だけで鰯の開きを三枚、味噌汁五杯、ご飯を丼で二杯追

加した瑞穂。“朝からよくそんなに食えるな”などと思いながら、野菜ジュースを一気に飲み干す廉。

「ふう、ご馳走様。少年、朝から野菜ジュースだけでは体がもたんぞ！」

「いや、昨日の焼き肉で胃がもたれて・・・」

「やれやれ・・・」

呆れ顔の瑞穂だが、むしろ廉の方が、呆れて何も言えなかった。

「おっと、もうこんな時間か・・・そろそろ行くとするかね」

「あ！瑞穂さん、これ・・・」

「ん？」

廉が差し出したのは、丁寧に包まれた四角い箱状の物体。

「お弁当です、足りないかも知れませんが」

「なんと！いやあ少年はいいお嫁さんになるな！」

「男ですけどね」

嬉々として弁当を受け取る瑞穂。心なしか、足どりも軽やかだ。

「さてと、俺も行かなきゃ」

予め用意してあった指定カバンを手に取り、戸締まりの確認をする廉。そこでふと、瑞穂に視線を向けた。どうやら聞いてみたい事があるみたいだ。

「どうした？」

「そういえば、瑞穂さんのお仕事って？」

「あー・・・言ってなかったか。んーそうだな、実際見てもらった方がわかりやすいんだが・・・」

“ふむ”と間を置いて、瑞穂はなぜか、廉の終業時間を聞いてきた。わけも判らずとりあえず時間を教えた廉に、瑞穂はポーチからメモ帳を取り出し、ボールペンで何かを書き始めた。

「これ、私の携帯番号だ。学校が終わったら、電話してくれ。迎えに来るから!」

「はぁ・・・」

イマイチ理解出来ていない廉だが、メモ紙を受け取り支度を終える。

「さて、行こうか？」

「そうですね」

玄関の扉を開ければ、雲一つ無い青空が“今日も暑いぞ!”と、語りかけているようだった。

05..廉と学校とお友達

AM 8..02

「おはよ〜」

「ういーす!」

廉が教室へ入れば、見慣れた友人達が彼を迎える。窓側の最後尾が、廉の席。机にカバンを置きながら、ボケ〜っとするのが彼の朝の日課なのだが、今日は前の席に座っていた長身の男子生徒が、それを許さなかった。

「お前、彼女が出来たのか!？」

「・・・宮部、寝言は寝て言え」

“朝から訳のわからん事を言う奴だ”と、廉は思っていた。しかし、
宮部と呼ばれた長身の生徒は、真剣な表情だ。

「お前、昨日スーパーで美女と買い物デートしてただろ!」

「なぜに知ってるんだ? はっ! お前まさか!？」

「そう、俺はあの時「ストーカーか! 宮部、悪いが俺は同性愛者じゃないんだ。お前の気持ちには応えられない」」

「ちがーう!! あの時俺も母ちゃんに頼まれてスーパーに来てたんだよ!..!」

宮部は叫ぶように否定したが、周りでは

「え、宮部ってそっち系?」

「確かに黒崎君は女性っぽい顔だけど・・・」

「モテないからって、男に走るとは・・・」

哀れ宮部。この日から彼はゲイキャラとして扱われ・・・

「てたまるかーっ!!」

「誰にツッコんでるんだ？まあいい、あれは姉さんの友達だ。彼女ではない」

「どうしてその“お友達”と二人で買い物に来てたんだ？」

「ああ、うちに居候することに・・・なんだ、皆どうした？」

教室にいた男子、そして女子までもが、廉の言葉に硬直。

「え？確か黒崎君ってひとり暮らしだったよ・・・ね？」

「うん」

「って事は、一緒に住んでる・・・」

「まあそういう事になるな」

ビシィィィッ!!!!!!

クラスに、亀裂音が走った。

ガシッ!!

「え、お、おい！何す「廉・・・」」

いつの間にか背後にいた別の男子から羽交い締めにされた廉は、ま

さかの宮部に言葉を遮られ、

「逝ってこい！」

「ちょ、待つ・・・」

「黒崎、随分ボロボロだなあ」

「・・・理不尽だ・・・」

担任の中年男性教師（坂崎）は、見た目ボロ雑巾と化した廉に目を向けたが、クラス中の男子生徒全員の殺気を含んだ視線に、追及を断念した。

「で、実際はどうなんだ？」
「何が？」

「おいおい、今更とぼけるなって。あれだけの美人、そうそういな
いって!」

午前中の授業も終わり、宮部を含む男子三人と昼食を摂っていた廉。
力説する宮部に適当に相槌を打ちながら“確かに”とは思いますが、昨
夜の夕飯、そして今朝の食事を思い出し・・・

「もう食べないのか?」

弁当に蓋をした。

「食べたいならやるけど・・・」

廉の対面に座る日焼けた肌の学生、相馬が尋ねた。

「なら貰う。なんせパン一個だけだと足んねえかな」

「早弁するからだろ?」

と、廉から見て右側に座る、相馬とは相対する白肌の学生、たかがみ高上は
皮肉る。

「確かに瑞穂さんは美人だと思うけど・・・」

「「「けど?」」」

「あの食欲を目にしたら・・・うえ、胃が・・・」

げんなりとする廉。

「“よく食べる美人”・・・健康的でいいじゃないか!」

「あれは“よく食べる”という範囲を超えている。一瞬だけど、俺
まで喰われると思った」

「性的な意味で？」

「ぶっ飛ばすぞ宮部」

“この変態め”と、冷笑を浮かべた廉に、宮部は軽い恐怖を覚えた。

午後の授業は、最初から水泳だ。ここで色めき立つのは、男子学生のみ。一方の女子生徒は、冷ややかに男子を敬遠していた。

本来なら、例年の今頃は持久走大会に向けてのマラソンがメインとなっているのだが、猛暑続く異常気象に、学校側がプール授業を延長したのだ。

「俺、プールの授業が1番好きだ！！」

「変態」

どうしてこんな奴（宮部）と“友達”なんだろうと、廉・相馬・高上は同じ気持ちになった。

柔軟を済ませ、少し痛い位に勢いのあるシャワーを浴びて、プールへ入水する生徒達。例外なく廉達も入水し、早速バカ（宮部）が相

馬（水泳部）に自由形で勝負を挑んでいた。

高上は同じクラスの彼女に呼ばれ、仲良く遊んでいる。必然的にひとり残された廉は、プカプカとのんびり漂っていて・・・

バシヤツ！！！！

「ぷあっ?!」

誰かに水をかけられ、塩素たっぷりの水を飲んでしまった。

「・・・ツケホ、ゴホゴホ!？」

「何をぼーっとしてんの？」

「ツホ、いきなり何すんだよ佐原^{さわら}！」

ムせる廉は、苛立ち混じりにひとりの女子に睨みを返す。

「腑抜けた顔してた廉が悪いのよ」

と、佐原は悪びれもせずに腕を組む。心なしか、胸を強調しているようにも見える仕草だが、

「アホかお前! ったく・・・」

と、廉は相馬達の方へと泳いでいってしまった。

「あらーだね・・・咲^{さく}」

「うわっ?! もう、びっくりさせないでよ詩織^{しおり}!!!!」

男子連中の方へ行ってしまった廉を見つめていた佐原（咲）の背後から声をかけた女子生徒は、やれやれといった感じた。

とうがね・しおり
東金詩織という名のこの女子は、佐原との付き合いが幼稚園から現在まで一緒という古馴染み。当然、

「ま、月島は鈍感みたいだし、苦勞するね」

「なっ、なっ!？」

咲が廉に片思いしてる事も、把握済みである。

「あんた、バレてないと思ってんの？クラスのみんな知ってるわよ」
「うぞ・・・」 「まあ月島が気付いてないだけまだ救われてるわね。
でも、油断は禁物！」

ビシッと人差し指を突き付けた東金。指差す方角には、宮部をプールに沈めようと奮起する廉の姿。

「バカ（宮部）が言ってたでしょ、月島が年上美人と買い物デートしてたって。おそらくデマじゃないと思うわ」

「り、理由は？」

「ま、勘だけどね。でもま、アタシの勘はよく当たるから」

フフン、と鼻を鳴らす東金に対し、咲は額に青筋を浮かべる。

「なんにせよ、遅かれ早かれ気持ちちは伝えるべきね!!」

「ど、どうやって？」

「それくらい自分で考えなさい。ほら、集合掛かってる!」

困惑を浮かべながら、咲はとりあえず他の女子達の元へ向かうのだった。

06：瑞穂の仕事と廉の趣味

キンコンカーンコン・・・

終業を知らせる鐘が、学校に鳴り響く。いそいそと片付けを始めた廉は、今朝瑞穂に渡されたメモ紙をカバンから取り出した。

「廉、遊びに行こ・・・う」

「ん、どうした？」

バカ（宮部）がくるつと後ろに座る廉に姿勢を向けた時、視界にメモ紙が映った。

「お前だけは！お前だけは親友だと思ってたのに！！」

宮部逃走。

「何だあいつ・・・ん、ああこれか」

“学校が終わったら、必ず電話しろよ（はあと）”

今朝、そんな事を書いてたっけ。などと思う廉だったが、

「ま、いっか」

自分を“親友”と言った宮部を追わず、メモ紙片手に教室を後にした。

正門に着いた廉は、携帯に番号を入力。通話ボタンに手をかけて数回のコールの後、

『もしもし？少年か？』

「あ、瑞穂さん」

瑞穂が電話に出た。

「今学校終わりましたけど」

『そうか、ならすぐに迎えに行く！』

「え？でも、学校の場所知らないんじゃない？・・・」

『宮商だろ？私の母校だ。ん、そうだな・・・10分で着く』

まさかOBとは。廉は驚いたが、この学校は姉の母校でもある。そう考えると、合点がいく。

とりあえず素直に瑞穂の言葉に従う廉。そして約束の10分に差し掛かろうとしていた時、

ブロロロローツ・・・

通学路には似つかわしくない真っ赤なスポーツカーが、廉のいる正門前で止まった。

スポーツカーの正面・サイドに輝く黒馬のエンブレム・・・

「フ、フェラーリ!？」

戸惑いと驚きを含んだ廉の声。

「よう、少年。待たせたな!」

「瑞穂さんっ!？」

廉、二度目の驚愕。

「なんだ? ほれ、乗れ乗れ!」

と、瑞穂は助手席のシートを叩き、ガルウィングが羽根の如く開いた。

「さて、出発!」

助手席に廉を乗せ、瑞穂はアクセルを踏み込んだ。

車を走らせ10分少々、着いたのは市街地の中央に位置する大きなショッピングモールの駐車場だ。

「さあ着い・・・何をしてるんだ？」

「え？ 記念に写メを」

「そんなに珍しいか？ まあいい、ほれ行くぞ！」

2、3枚写メを撮り終えた廉は、瑞穂に手を引かれながら歩を進めた。

「ほれ、ここだ」

「あ、あれ？ ここって・・・」

瑞穂が連れて来たのは、若年から中高年まで幅広い世代の女性から人気のあるアクセサリショップ

“ROSE・GARDEN”

だった。

「ほお、少年はうちの店を知っていたのか」

「知ってるもなにも・・・」

と、廉は口を濁らせた。その時、

「瑞穂っ！一体どこをほっつき歩いてたのよ！！」

怒声を発しながら、おそらく瑞穂と同年代であろう若い女性が、腕組みしながら出て来た。

「悪い悪い、私のパートナーを連れて来たんだ。まあそう怒るな」

「あら、そうな・・・って、廉くん！？」

「ども、ご無沙汰してます・・・」

廉の姿を確認した女性は目を見開き、廉はというと、苦笑いで頭を小さく下げた。

「少年、夏希^{なつき}を知ってたのか？」

「知ってるもなにも、廉くんはうちのお得意さんだし！」

「へ？」

「相変わらず“アレ”続けてるの？」

「ええ、まあ・・・」

話が見えない瑞穂を知ってか知らずか、夏希は矢継ぎ早に、廉に質問攻め。廉もたどたどしく質問に答えている。

「こゝら夏希、お客様ほっぱり出して！」

「いひゃい！廉ひゅんヘルプミー！！」

と、店の奥から出て来たもう一人の若い女性が、夏希の頬を抓って店の中へと消えていく。

「真菜さん・・・相変わらず怖い」

「なんと、真菜も知っていたのか!!」

二人の女性店員を驚かせてやろうと思っていた瑞穂だが、返って自分が驚かされっぱなしという結果に、何となくムスツとしてしまう。

「瑞穂さん、どうしたんですか？」

「むう・・・」

何故瑞穂の機嫌が悪くなったのか、廉は知るわけもなかった。

その後、どうにか機嫌が直った瑞穂は、廉を連れて店の奥にある部屋に案内した。そこで廉が目にした光景は・・・

「うわぁ・・・すごい!!」

壁一面に飾られた色とりどりの天然石。その石の一つ一つが、白のみの殺風景な壁を鮮やかな絵画のように変化させている。

「気に入ってくれたようだな」

「すごい、すごいですよ瑞穂さん!!」

興奮気味に感嘆の声が、廉の口から溢れ出す。その様子を満足気に眺めていた瑞穂は、作業机に置き忘れていた冷めたコーヒーに、そっと口を付けた。

その後、廉は瑞穂がこの店のオーナーでデザイナーであるという事、仕事は裏方の作業がメインなので、滅多に表に出て来ないという事を聞いた。

「ま、廉がこの店のお得意さんだとは、知らなかったがな」

「それはお互い様じゃないですか？」

「だな、アツハハハ！」

高らかに笑う瑞穂に、廉も気持ちが悪くなっていた。

その後は瑞穂の仕事ぶりを見学しながら時間を潰し、日も傾き始めた頃、接客を終えた夏希と真菜が作業場に戻ってきた。

「瑞穂、表は終わったわよ」

「ん、了解」

「お疲れ様です！！」

時計はまだ7時を迎えておらず、人通りは廉が店に着いた頃よりも多い。それでは何故、彼女らは店を閉めたのだろうか？廉には不思議だった。

「ああ、ある程度の売り上げと客足だ。基本、私たちの店に来る客の

大半は昼頃が1番多い。という事は、この後何時間も電気を使い続けるのは勿体ないだろう？」

何か言いたげな廉に、瑞穂は心を見透かしたように説いた。

「ま、接客下手な瑞穂じゃ説得力に欠けるけど」

「ほっとけ」

「ま、それより・・・」

と、瑞穂を皮肉った夏希は、廉に目線を配り、口角を軽く吊り上げた。

「相変わらず作ってる？ネックレス」

「ネックレス？」

「夏希さ「良いじゃない！隠す必要ないと思うな私は」」

と、焦る廉の言葉を遮り、夏希は悪びれもせずに、話を続けた。

「ほら、今も廉くんに作ってるもらったネックレス、付けてるわよ！」

「実は私も」

“ほら！”と、夏希は首元のボタンを外す。ついでに真菜も、首元をアピールする。

夏希は、紅い雫型のガラス玉が、ブラックレザーの紐に組み込まれたシンプルなチョーカー。真菜は、中心にアメジスト（紫水晶）をあしらった銀細鎖のネックレス。それぞれに見合った一品だ。

「これ、ホントに少年が作ったのか！？」

「はあ、まあ」

瑞穂は、そのネックレスの精巧さと感性の良さに驚かされた。しかも作ったのが、自分より年下の男子高校生なら尚更だ。

「つて事は、昨日少年の言ってた“秘密の趣味”とは・・・」

「はい。これです・・・ネックレス作りって、趣味としては女性っぽいから秘密にしてたんです」

「私は才能だと思うから、秘密にする必要はないって思ってたんだけど」

「まあ、確かにこれは才能だ」

と、素直に廉の才能を褒めた瑞穂。

「初めて店に来てくれた時、男の子のお客さんだから珍しいなあと思って。んで話しかけてみたら、ネックレスを趣味で作ってるって聞いたから、冗談で“私に似合いそうなネックレスを作って！”ってお願いしたのよ」

「で、これか・・・」

「スツゴく気に入ったの!」

「で、夏希の話を聞いて、私もお願いして作ってもらったんだ」

夏希の話を、真菜も相槌を打つ。

「成る程・・・だが」

いまいち腑に落ちない瑞穂は、隣に座る廉に目を配る。どこことなくその表情は、小さい子供がおもちゃを取り上げられ、拗ねているような感じに見えた。

「夏希と真菜は少年からネックレスを作ってもらってるのに、私だ

け持っていないのは、不公平じゃないか？」

「え？だって頼まれてないし・・・」

「少年、もちろん私に似合うネックレスを作ってくれるよな？」

ガシッと肩を掴まれた廉は、悪魔顔負けの裏のありそうな瑞穂の笑みに、

「ひ、ひゃい！」

と、声を震わせた

07：駐車場までの道程で・・・

営業を終え、廉・瑞穂・夏希・真菜の4人は、帰りもせずに、話に耽っていた。最初は他愛のない内容ばかりだったが、いつしか話題は瑞穂のお弁当の話に。

「でもさ、ホントにびっくりしたのよ！コンビニ弁当ばかりの瑞穂がお弁当なんて。地震が来るかと思ったわ！！」

「私は火山が噴火するかと・・・」

「お前ら・・・」

夏希はケラケラと笑い、真菜は真顔で瑞穂をからかう。瑞穂は額に青筋を立て、片方の眉を吊り上げた。

「でもさ、まさか瑞穂の居候先が廉くんのお家だったなんて」

「少年のお姉さんと私は高校時代からの友人でな、お互い気心の知れた仲だったし、部屋を貸してくれたってわけだ」

「成る程、それでこの“私生活ダメ人間”を、廉くんが健気に世話してる・・・と」

二人に“ダメ人間”扱いされ、瑞穂は怒りを忘れてうなだれた。

「まあ家事は慣れてるし、一人分も二人分も変わんないから気にしてませんけど。あ、でも洗濯だけは覚えてもらいました！」

「なあ少年、洗濯はまとめて洗えば節水にもなると思うんだ。だから私の分も、少年と一緒に洗えば・・・」

さりげなく廉は瑞穂のフォローをしたのに、当の本人が、“ダメ人間”を証明した瞬間だった。

「夏希さん、真菜さん、この人に“恥じらい”という言葉を教えてやって下さい……」

廉は切に願った。

「でも、廉くんってすごいわね！デザイナーとしてのセンスは抜群だし、家事はやってくれるし、オマケにお弁当まで……瑞穂、アスタが羨ましいわ」

「ホント、羨ましい……」

「フン、生憎少年は私だけで手一杯だ！」

「自慢にしないで下さい！」

冷ややかにツッコむ廉。程なく会話も終了し、夏希と真菜を見送った後、瑞穂は店に施錠して廉と二人で帰る事に。

「瑞穂さん、車はこっちですよ！」

明らかに駐車場とは逆方向へ歩き出した瑞穂を廉は呼び止めた。

「いや、しかし……世話になってるだけでも厚かましいのに、さすがに車庫まで借りるのは……」

「でも、あの駐車場って月極めでしょう！？うちならタダですよ。それに、うちって車庫はあるけど車は無いんですよ。使ってください！」

言葉を濁した瑞穂だが、廉は笑って説いた。

「ホントにいいのか？」

「全然OK！です。それに……」

“それに？”と聞き返そうとした言葉が、喉から出かかって、ふっと消えた。

「俺、なんとなく寂しかったみたいです。独りでご飯食べて、一人でテレビ観て、会話する相手もいなくて・・・昨日、瑞穂さんが居候するって聞いた時には困惑したけど、本当は嬉しかった」

今、自分が思う素直な気持ちを廉は言葉に変える。

「馬鹿馬鹿しいと思うかもしれないけど、瑞穂さんは俺にとって、もう一人の“家族”だと思ってます。だから遠慮しないで下さい！」

言い終えた廉は、照れ臭そうに頭を掻いた。

「・・・ありがとう！」

ただ“彼の姉の友達”ってだけで、半ば強引に“居候”して・・・本当なら嫌がられるのが当たり前。なのに廉は、自分の事を“もう一人の家族”だと言ってくれた。その心が、瑞穂は嬉しかった。だからこそ、素直な気持ちで“ありがとう”の一言が出て来たのだ。

「あ、でも自分の服は、自分で洗濯して下さいねっ！」

「むう・・・ケチ！」

悪戯っ子のような廉の笑みに、ぷうっと頬を膨らませる瑞穂。

しかし、二人の心は温かい“気持ち”でいっぱいだった・・・

08..残念?

帰りにスーパーへ寄った瑞穂と廉。さすがに閉店1時間前だと、生鮮食品も少ない。とりあえず残った商品をカゴの中へ詰め込みながら、頭の中で献立を思案中の廉。

「瑞穂さん、好き嫌いってありますか？」

「特に無い。まあ、強いて言うなら・・・」

顎に手を当て考える瑞穂は、ふと何かを思い出したようだ。

「スッポン鍋は苦手だな。以前興味本位で店で注文したとき、鍋の蓋を開けたら・・・ぶつ切りにされたスッポンの手が、パの状態で汁から突き出ていてな。食欲が失せた」

「そうですか・・・」

普通の家庭じゃ、スッポン鍋なんて食べねえよ。廉はなんとなく想像して、げんなりした。

大量の挽き肉に玉ねぎ、人参。どうやら今日は、ハンバーグのようだ。会計を済まそうとレジに向かった廉に、瑞穂は何かを差し出した。その手には、諭吉さんが1枚。

「瑞穂さん？」

「“家族”だろうか？ならば、私がお金を払ってもおかしくはない・・・だろうか？」

瑞穂なりの気遣い。“お言葉に甘えて”と、素直に廉も受け取った。

案の定、今日の夕飯はハンバーグ。そしてポテトサラダに、デザートはスーパで瑞穂がねだった杏仁豆腐。それぞれに舌鼓を打った瑞穂は、テレビの前のソファで寛ぎながら、廉が皿洗いを終えるのを待っていた。

「瑞穂さん、お風呂沸いてますんで、先どうぞ！」

「あ、ああ・・・」

本当は直ぐにでも、廉の秘密の“趣味”を披露して欲しいと思っていた所だが、それはお風呂の後までちょっぴり延期に。

「ふう・・・」

シャワーを浴び、湯舟に浸かる瑞穂は、心地良い湯の温もりに癒されていた。

だが、いつまでも湯舟に浸かっているつもりは無い。風呂から上がり、手早くタオルで水滴を拭う・・・と、自分が着替えを持って来ていない事に気付いた。

「しょうね〜ん！」

皿洗いを終え、麦茶を飲んでいた廉の耳に届いた瑞穂の声。何かと脱衣所へ向かうと、バスタオル一枚の瑞穂。

慌てて視線を逸らした廉だが、もう遅い。バツチリと瑞穂の姿を見てしまった為、顔は真っ赤に染まってしまった。

「な、なんて格好してるんですか！早く服着て下さい！！」

「おお、着替えたいのは山々だが、着替えを忘れてな。私の部屋のベッドにあるから持って来てくれ」

「わかりました」

言われた通り、廉は直ぐに着替えを取りに。

瑞穂の部屋に入ると、姉の残していったベッドや机が目につく程度のシンプルで殺風景な光景が、廉の視界に入ってきた。直ぐさまベッドに視線を配れば、瑞穂の言う通り、枕の横にちょこんと着替えが準備されていた。ただし、ピンクの下着のみ・・・

「瑞穂さん、着替えを持って来ました・・・」

「おお、スマンな・・・あれ、私はこんなものを置いてたつもりはなかったがなあ」

ドア越しに廉から渡されたのは、自分が用意していた下着と、見覚えの無い薄手のパジャマ。

「姉が置いていった物です」

「私は別にこれだけでも構わないんだが・・・」

「俺が気にします！ったく・・・」

着替えを渡した廉は、そそくさとリビングへ戻って行った。
瑞穂も着替えを済ませ、廉のいるリビングへ。

「いやあいい湯加減だった！」

「少し熱くなかったで・・・」

「ん、どうした？」

テレビから視線を瑞穂に向けた廉、フリーズ。直後、またしても顔を真っ赤にして瑞穂から視線を外した。しかし瑞穂には、全く理由がわからなかった。

「せ、せめてボタンくらい留めて下さい！！」

下はきちんと履いているものの、上はボタン全開のパジャマ姿の瑞穂。当然、パジャマからはピンクのブラが惜し気もなく晒されている。

「ボタンを留めたら暑いじゃないか！」

「もうっ、ブ、ブラが見えてるんですっ！！」

「刺激的だろ？」

悪びれた様子もなく、瑞穂はニヤニヤと廉をからかった。

「少年、慣れろ！」

きっぱりと言い切った瑞穂。どうやら自分のスタンスを変えるつもりは無いらしい。

「だったらガン見しますよ！」

半ばやけくそになった廉は、ガバツと瑞穂に向き直った。
細身の肢体はやはり無駄な“脂肪”が無く、お腹もすっきりと引き
締まっている。ただ残念な事に、胸にも余分な脂肪が無かった。

“まな板？”

“残念な胸”に、廉は恥ずかしさよりも“哀れみ”の視線を瑞穂に
向けた。

「・・・・・・・・」

「そんな悲しそうな瞳で見るな・・・」

瑞穂にも、自覚はあるらしい。

「ま、まあ気にする事無いと思いますよ？」

「でも、やはり男なら“小さい”よりも“大きい”方が良いだろう？」
「好みの問題じゃないですか？」

「少年は、どっちが好みだ？」

「んーやっぱり多少は“あった”方が・・・」

数分後・・・

「瑞穂さーん、機嫌直して下さいよ・・・」
「・・・フン、どうせ私なんか」

部屋に籠る瑞穂を宥めるのに、廉は小1時間を要するのだった。

09..秘密の部屋

どうにか瑞穂の機嫌も直り、廉は一先ず風呂に入る。風呂から上が
り、黒ジャージ姿になった廉は、恍惚な表情でカップアイスを食べ
ている瑞穂を見つけた。

「お、上がったか！」

「瑞穂さん、それ俺のアイス・・・」

「堅苦しい事を言うな、じゃあ、さっそくあの部屋の中を見せてく
れ！」

“ほれほれ！”と、瑞穂は木のさじをくわえ、カップアイスを片手
に2階へと足を向けた。

「まあ大して期待させる物もありませんが・・・」

廉はドアを開いた。

「・・・ほお！！」

壁一面には、様々な種類のネックレス。部屋全体がまるでプラネタ

リウムのような輝きを放ち、思わず瑞穂は声を漏らした。

「一つ一つが、素晴らしい一品だ！これは全て少年が作ったのか！？」

「ええ、まあ」

「趣味だけにしておくのが勿体ない！！」

「本職にそう言ってもらえて、本当にうれしいです！」

本職の瑞穂が認めてくれたのだ。嬉しくないはずがない。廉は恥ずかしさと嬉しさで、頬を薄紅色に染めた。

「ふむ、これで夏希や真菜の身に付けていたネックレスの事も、合点がいく」

瑞穂とて、廉を疑っていたわけじゃないが、確証が無かった。しかし、こうして部屋の中で廉の作った様々なネックレスを目にしたのだ、納得するには充分だった。

「本職の私が感動するとはな・・・むう、素質は私以上だ！」

「褒めても何も出ませんよ」

廉は冗談半分におどけてみたが、瑞穂は本心でそう言ったのだ。

「ふふっ、私が認めてるんだ。もっと素直に喜べ！それにしても、ふうむ・・・」

「どうかしました？」

グルッと部屋一面に飾られた瑞穂は、下顎に手を当てながら、何かを思案中。と、廉の声が耳に届いたのか、視線を彼に向け直す。

「少年、この中から幾つかを、私の店に飾ってみないか？」

「え、飾るって!？」

「このままこの部屋だけで飾られるより、もっと多くの人に見てもらうべきだと思うんだが・・・どうかね？」

誰に見られる事もなく、ただこの部屋で壁の一部となったままでは勿体ない。ならば、より多くの人が立ち寄る自分の店で飾ってみてはどうか？と、瑞穂は提案してきたのだ。

「でも、なんか恥ずかしいような・・・」

「別に少年が飾られるわけじゃないんだぞ。それに、少年はもっと自分の才能を誇るべきだ！」

瑞穂は廉に説く。それに、負けず嫌いな瑞穂は口にこそ出さないものの、確実にデザイナーとしての才能は、自分より廉のほうが上だと認めていたのだ。

「瑞穂さんが、そこまで言ってくれるなら・・・よろしく願います!!！」

「うむ、任せろ！」

ドンツと胸を叩く瑞穂は、ニコツと笑う。廉も、瑞穂の笑顔につられ、薄く笑みを浮かべた。

その後、飾られている様々なアクセサリーから廉と瑞穂は5点づつの、計10点を厳選。瑞穂は責任を持って、自分の私物である籐編みのカバンにしまい込んだ。

「・・・と、危うく忘れる所だった！」

「？」

「少年、私に似合うアクセサリー、忘れるなよ？もちろん、あの二

人以上の品を、期待してるぞ!!」
「・・・善処します」

さりげなくプレッシャーをかけるのが、なんとも瑞穂らしい。瑞穂の顔を見ながら、デザインを頭で組み立て始めた。

10: ご機嫌瑞穂と寝不足廉（前書き）

PV5000を超えました。ありがとうございます！

10 ご機嫌瑞穂と寝不足廉

一夜明け、昨日通り瑞穂を起こしに部屋の前まできた廉だが、

「・・・ふぁ・・・」

欠伸が止まらない。瑞穂に似合う“アクセサリー”を図案化する為に、浮かんだデザインを全てイラストに。その数はざっと20枚以上。だが、どれも瑞穂のイメージに合わない。結局、納得のいくデザインをイメージ出来ぬまま、朝を迎えてしまった・・・という訳だ。

「瑞穂さーん、朝で・・・」

バンツ！！

「おはよう少年！・・・あ？」

勢いよく開け放たれたドアとともに、爽やか全開の瑞穂が顔を覗かせたのだが、何故か視界に廉の姿が映っていない。ふと下を見れば、頭を押さえてうずくまる廉を発見。

「どうした！誰にやられた！？」

「・・・瑞穂さんに・・・」

開け放たれたドアは、廉の額にクリーンヒットしたらしい。見事に赤くなっていた。

「お？スマンスマン！さーて、今日の朝ごはんはなにかな？」

アッハハーと笑いながら、瑞穂はリビングへと降りてゆく。なんとなくテンションが高いのは気のせいだろうか？と、廉は不思議に思いつながら、瑞穂の後に続いた。

本日の朝食は、カリカリに焼いたベーコンと、スクランブルエッグにコーンスープ。コーンは、わざわざ冷凍していたトウモロコシを使った、廉のお手製である。案の定、余分に焼いたトーストとコーンスープは、瑞穂のお代わりで瞬く間に消えてしまった。既に制服に着替えた廉は、着替えに戻った瑞穂を待つ間に食器を洗い、歯を磨く。

「ふいふ、相変わらず少年の飯は美味いな！ん？目の下にクマが出来てるぞ、寝てないのか？」

「デザインを考えてたら、朝になってました」

「おいおい、あまり根をつめるなよ！私の為に頑張ってくれるのは嬉しいが、無理はするな。私だって、気長に待つさ」

ズレたメガネをクイツと上げ、瑞穂は廉に優しく諭す。

「さてさて、少年よ。今日学校が終わるのは何時頃かな？」

「今日ですか？今日は・・・学祭の出し物を決めるから少し遅くなると思いますが」

瑞穂に返事を返す廉は、先程から瑞穂のテンションが高い事が気になる。

「瑞穂さん、テンションが高いですね。何かいい事でもあるんです

か？」

「わかるかね！？今日は嬉しい給料日ー！！」

成る程、どうりで瑞穂のテンションが高いはずだ。

「少年、終わったら電話してくれ！」

「え、また学校に来るんですか？」

「悪いかね？」

悪いという訳じゃない。ただ、“アレ”に乗って来るという事は、嫌でも注目を集めるだろうと、廉は直感していた。

「いやあわざわざ迎えに来なくていいですよ。バスで来ます！」

「バス代が勿体ない！」

「注目を浴びるくらいなら、むしろ安いです」

「むう・・・」

廉に説得され、渋々納得した瑞穂。気付けばもう、家を出る時間だ。
“送ろうか？”と言う瑞穂をやりわりと断り、廉は学校、瑞穂は職場へと向かうのだった。

11：学祭の出し物は？（前書き）

日に日にアクセスが伸びて、読者の方々には感謝しています！ご意見・感想も受け付けてます。気軽に評価して下さい。

11：学祭の出し物は？

いつものように、始業開始15分前に教室に着いた廉だが、彼に向けられた視線がいつもと違う。

「おいおい親友、今日はフェラーリ登校じゃないのか？」

「んなワケないだろ、だから“バカ”扱いされるんだお前は」

薄々気付いていた。昨日の一連の出来事で、注目を集めていた事を。それを証明したのが、開口一番で廉を皮肉ったバカ（宮部）の言葉。軽くあしらいながらも、周囲からの好奇心な視線が“何事もなく終わる”ワケが無いと、廉は悟らざるを得なかった。

休み時間毎に繰り返される質問と視線は、エンドレスに続く。いい加減うんざりしていた廉は、昼飯中にいつもの3人に事情を説明していた。

「とまあ、そんなワケ。しかしフェラーリで来るとは思わなかったけど」

「ふーん」

「成る程ね」

相馬、高上の二人は納得してくれたのだが・・・

「だからって、だからって、あんなお姉様は反則だろっ!!」

バカ（宮部）は当然、納得しない。

「で、だいたいどんな人かはわかったのか？」

「そうだね、廉の居候相手がどんな人かは気になるなあ!」

バカの存在は、空気の如くスルー。廉の話に、二人は瑞穂という人物がどのような人間なのかという事に、興味を抱いた。

「う・・・ん、顔は美人だなあ。背も高いし。あと、口調は男っぽいかな。あとは・・・ああ、残念な胸だった!・・・あ」

ピシッ!!

昨日に続く、亀裂音。しまった!という顔をしたが、もう遅い。男子からは羨望と殺気、女子からは冷ややかな視線が、廉に降り注いだ。

「見たのか？」

「いや、あー・・・えっと・・・」

「見たのか？」

「見たというか、・・・ち、直接見たわけじゃな・・・」

「見・た・ん・だ・な・?」

「・・・はい」

宮部の威圧的な尋問に耐えられなかった廉は、小さく肯定。

「で、でも相手はちゃんとブラを着けてたし、見たくて見たワケじゃ・・・」

「そうか・・・」

「わかってくれたか？ いやあお前ならわかってくれ「執行!!」」

どす黒い笑みを浮かべた宮部と殺気を含んだその他大勢の男子。

“俺、死んだな・・・”

薄れる意識の中、廉はそう感じた。

「・・・きし・・・」

・・・

「・・・きしまー!」

・・・

「・・・きしまー!」

・・・

「月島！」

！

「・・・っ痛」

「やっと起きた。大丈夫？」

「・・・佐原？」

覚醒した意識と、後頭部に残る痛み。そして、心配そうに顔を覗かせる咲。

「よく眠ってたわね、もう6限始まるわよ」

「・・・は？掃除は？」

黒板前の壁掛け時計は、既に3時を過ぎている。という事は、少なくとも2時間くらい廉は気絶していたのだ。

「ってか、大丈夫？」

「ああ、何とか。バカは加減を知らないからな」

「誰がバカだ！！」

すぐにツツコミを入れた宮部。クラスでバカ扱いされている自覚はあるらしい。ともあれ、さっきまでの好奇心な視線はなりを潜め、何時もの雰囲気になったクラス。大方、相馬と高上が取り計らってくれたのだろう。廉は心の中で二人に感謝しつつ、前の席に座る宮部をひと睨み。

「なんだよ！？」

「いや、別に・・・ハァ・・・」

“お前に相馬達のような理解力と気遣いがあればな” などと思いながら、廉は小さくため息。

その後、担任も教室へ入り、6限開始。授業というより、翌月にある学祭の出し物についての話し合いである。

「・・・で、意見はあるか？」

「ハイッ!!」

級長を勤める高上の声で真っ先に手を挙げたのは、宮部である。

「俺は、クラス的女子全員のコスプレ喫茶を提案します!!」

「却下!」

「うえ!？」

即決で宮部の提案は級長・副級長に却下された。副級長である冴羽はクラスの女子代表としてだが、高上は・・・

「・・・なぜ恵美（彼女）の可愛い姿を他の野郎に見せなきゃならんのだ身の程を知れ変態」

ほぼ個人的な理由だった。なににせよ、低くて圧のある高上の声と女子全員から向けられた痛い視線で、宮部は黙る事しか出来なかった。

その後、あーだこーだ意見が出た後で、クラス有志の男女による劇と、小数男子の露店（焼きそば）に決定。

「ま、俺は人前に出るのは苦手だから、裏方の方に・・・」

「廉、お前は劇の方に出る事に決定してる」

「はぁ！？」

寝不足が祟ってか、話し合いにあまり参加していなかった廉は、事態が把握出来ず、高上の言葉に目を丸くした。

「お前が寝てる間に決まった事だ」

「ちょっと待て！なぜ俺が劇に出なくちゃいけないんだ！！」

「ま、女子の意見だ。むさ苦しい野郎が相手より、女顔のお前が相手役なら抵抗も少ないだろうからな」

「待て待て！相手役って何だ！？」

「当然主役かヒロインだな」

高上の言葉に、廉以外の生徒は全員頷く。

「・・・百歩譲って主役ならわかる。いや、わかりたくもないが、ヒロインってなんだ？」

「おいおい、どちらかといえばヒロイン顔だろ、お前は」

再び頷く生徒。

「まあ明日の昼休みに何の劇をするか決めるとして、お前は主演も

しくはヒロイン役に決定。これはクラス全員の意見だ。異存は無いよな？ん？」

有無を言わせぬ高上とクラス全員の視線。彼に退路は無かった。

P
M
5
..
3
0

「あっひゃっひゃひゃ！ヒー・・・つくくっ!!」

「もうっ!! そんなに笑わないで下さいよ!!」

「すまんすまん・・・だが・・・つぶ、くくっ!!」

放課後、店に着いた廉は、話し合いでの出来事を瑞穂に説明し、爆笑された。

「あー・・・笑った! しかし、もうそんな時期か」

瑞穂も、廉と同じ高校の卒業生。懐かしむように、目を細めた。

「瑞穂さんは、何をしたんですか？」

「んゝ・・・たしか短編映画を造ったなあ。ま、私は裏方だったが、少年のお姉さん・・・つまり瑠華^{るか}は、脚本と演出を手掛けたんだ」
「姉さんが！？初耳です！」

意外な所で姉の過去を知った廉。

「ふふっ・・・しかし、今回は姉譲りの顔が祟ったみたいだな。さてさて、少年の晴れ舞台だ、楽しみだなあ」

「来る気ですかっ！？」

「話は聞いたわあゝ・・・」

「うわっ！！！？？」

忍び足で廉の背後から肩を叩き、声をかけたのは真菜である。飛び跳ねんばかりの驚きを見せた廉に、満足そうな笑みを浮かべた。さらに、後から作業場に入って来た夏希も、ニヤニヤと笑っている。

「学祭の日は店休日だな！」

「当然！」

「楽しみだわ・・・」

この三人なら、多分本気で休みにするだろう。学校にも店にも同情してくれる相手のいない廉は、がっくりと肩を落とした。

12::三人の絆

前日同様、早めに店を閉めた瑞穂。こんなんで商売がやっていけるのか？と思う廉ではあるが、素人が口を挟む事ではないと、閉口した。

「さーてさて、今日は嬉しい給料日ー！の、前に」

浮かれ気分の瑞穂は鼻歌混じりに廉を見る。

「少年に報告しておきたい事がある」

「なんですか？」

「うむ、少年の作ったネックレスだが、予想以上に評判が良くてな。常連客に譲って欲しいとお願いされてるんだ。まあ売り物ではないと断ったんだが」

それは、廉の作るネックレスが世間に認められた事を証明する言葉。嬉しさよりも、驚きのほうが勝った廉は、あんぐりと口を開けたまま硬直・・・。

「おい、聞いてるのか？少年？」

「・・・あ、す、すみません！ちよつとびっくりして・・・」

「結構売って欲しいってお客さん、多かったのよー！！」

「この話、ホントよ。瑞穂じゃ信憑性に欠けるから、私らが証明するけど」

「なあ、私ってそんなに信頼無いか？」

「「無い」わ」

「少年ー！二人がイジめるー！！」

二人の見事なハモりに、瑞穂はいじけて廉に泣きつく。

「まあまあ・・・でも、嬉しいですよ！」

「私もさ、実は欲しい作品があるのよー！できれば譲って欲しいな
ゝ・・・なんて」

「夏希、さすがに図々しいと思「いいですよ」いいの！？」

なんともあつさり快諾した廉に、真菜も思わず声を上擦らせた。

「えっ、だってやっぱり欲しい人が身につけるのが当たり前だし・
・」

「ホント！？やった！さっすが廉くん太っ腹！！」

「じゃあ私も・・・実は気になってるのがあるのよ・・・」

ショーケースに飾られた廉作のアクセサリーを嬉々として物色する
夏希と真菜。その光景を、嬉しそうに見る廉と、啞然と見つめる瑞
穂。

「いいのか？」

「はい！ただ飾られてるより、やっぱり身につけてもらった方が嬉
しいかなあと思って。だから、欲しいって言われたら、譲ってあげ
て下さい！」

昨日から、考えていた事。もし、もしも、自分の作ったアクセサリ
ーを気にいってくれる人がいるならば、感謝を込めて譲りたい。“
ありがとう”と、気持ちを込めて。“自惚れ”“自信過剰”だと、
廉は自分に苦笑。けど、三人の話を聞いて、思いをはっきりとさせ
る事が出来た。

「瑞穂さん、ありがとう！」

「？イマイチ理解出来ないが、まあ、どういたしまして」

今日は嬉しい給料日♪美味しいお料理食べましょう！美味しいお酒も飲みましょう！！

テンションが一層高くなった瑞穂。ケースからお気に入りを物色した真菜は、事務所の金庫から封筒を三枚取り出した。

「これは瑞穂のお給料、こっちは夏希、これは私の分」

「「ありがとうございます！！」」

ニコニコ笑顔で封筒を受け取る瑞穂と夏希。だが、何となく構図がおかしい。

「あれ？瑞穂さんがこの店のオーナーですよ？でも・・・」

「ああ、真菜はこの店の経理が主な担当だ。ちなみに夏希は接客担当。まあそれぞれ適材適所の役割を果たしてるし、私と夏希は経理が苦手。夏希と真菜は、デザインから物を作り出すのが苦手。私と真菜は、接客が苦手・・・って具合」

「成る程！」

「それからもう一つ。少年は勘違いしてるかもしれないから言っておくが、この店は三人が出資して出来たんだ。その中で出資額が一番多かったのが私。だから、オーナーなんて肩書だけさ。考えても

みろ、この歳で自分の店を持つてゐるなんて、よほどの大金持ちぐらいなものだろ？」

瑞穂の説明は簡単でありながら、廉を納得させるには充分だった。

「誰がオーナーだろうが関係ないさ。この店は三人で一つの店なんだから」

「そうそう！それに私はオーナーってガラじゃないし！」

「オーナーって役を押し付けたのは私達だし、逆に瑞穂のおかげでのびのびと仕事出来てる。私と夏希も、瑞穂には感謝してるのよ・・・」

けして“ありがとう”と口には出さない真菜だが、その声色でわかる。互いを信頼しているからこそ、この店は成り立っている。

目には見えなくても、そこにはちゃんと“絆”がある。廉は三人を、微笑ましく眺めていた。

13…今夜は洒落たディナーのはずが・・・

本当なら、このまま少年と二人で洒落たディナーでも・・・と、瑞穂は考えていた。

が・・・

「お料理出来ました〜!!」

「お、きたきた!!」

「あら、ホントに美味しそう!」

「・・・・・・・・」

目論みは、夏希の言葉で呆気なく崩れた。

遡る事、30分前―

「さて、それじゃそろそろ・・・」

「ねえね〜! 廉くんの家ってどんな感じ?」

「私も興味があるわ。お料理とか・・・」

と、世話になっている廉をエスコートしようと声をかけたら、夏希が要らぬ一言。当然、真菜も口を挟んだ。

「どうって、普通の家ですけど」

「ん〜見てみたいんだけど、どうかな?」

「ち、ちよっと待っ!」

「ああ、いいですけど・・・おもてなしは、料理ぐらいしか出来ま

せんよ？」

廉はあっさり承諾。

「し、少年・・・今日はせつかくの給料日だし、感謝の意味を込めて、私がディナーに・・・」

「瑞穂さん、いくらお給料が入ったからって、無駄使いは良くないですよ？」

廉は堅実派だった。

「じゃあ決まりね」

「やった！んじゃ私、店に置いてる“お泊りセット”取ってこよう！！」

「えっ？えっ？？」

蚊帳の外の瑞穂をよそに、話はとんとん拍子に進む。こうして、豪華ディナーは自宅パーティーに変わったのだ。

突き出し・前菜・メインディッシュの魚料理に肉料理・・・小1時間、あっという間にテーブルを埋め尽くす料理の数々。対瑞穂用に、量も普段と桁違いである。

「さてと、廉くんも揃った事だし・・・乾ば「ありや、賑やかだと思ったら・・・」

「姉さん!!」

グラスを持ち上げ、乾杯の音頭をとろうとした夏希の声に、いつの間に来てたのか、廉の実姉である瑠華^{るか}の声が被さった。

「なーに驚いてんの？姉が実家に帰って来るなんて、当たり前的事じゃん。それに、綺麗な女の子はべらせて・・・」

「お邪魔してるよ！」

「久しぶり、相変わらず元気みたいね」

真菜も夏希も、瑠華とは専門学校からの友達である。挨拶も軽い。

「ああ、夏希も真菜も、うちに来た事なかったっけ？」

「ってか、急にどうしたの？」

「明日店休日だしさ、ついでに瑞穂と仲良くやってるか、心配になって来てみたって訳！」

弟思いの姉である。

「・・・で、なんで瑞穂はご機嫌ナナメなの？」

「瑠華！」

ぶすくれた瑞穂は、瑠華に泣き付き事情を説明。

「ああ、廉はお人よしだしね・・・ま、諦めなさいよ」

「そーそー！んじゃ、瑠華も加わった事だし、改めまして・・・」

“乾杯〜!!”

こうして、自宅パーティーは始まった。

「これ、美味しい!!」

「こっちも美味しい!」

「あゝ最高だわ〜!」

「廉、お代わり!!」

あれだけの量があったのに、あっという間に消えていく料理。席に着くひまのない廉だが、腕をふるうその表情は嬉しそうだ。

「ふああ、終わった〜・・・」

ようやく落ち着いたのは、パーティーが始まって約2時間後。瑞穂対策用に買い占めた食料も、底を尽いた。冷蔵庫で冷やしておいたフルーツゼリー（廉のお手製）を配り終えた廉は、心地良い疲れが眠気を誘い、テレビ前のソファにもたれながら、静かに瞼を閉じた。

「おや、寝てしまったのか・・・」

缶ビール片手にソファに近づいた瑞穂は、すやすやと眠る廉を見ながら目を細める。

「眠ってる顔も可愛いわねえ・・・」

「ま、廉は生まれてくる前に性別を間違えたようなもんだし」

「お料理上手で洗濯・掃除の家事も出来るし、オマケに年下の美系男子・・・彼女が居なかったら、マジで立候補するわ私」

最後に放った夏希の言葉が、瑞穂の片眉を吊り上げた。

「おいおい、仮に百歩譲って少年に彼女がいなかったとしても、彼女になるのは私だろう？」

「経済能力皆無の夏希と色気ゼロの瑞穂なら、私の相手にならないわ。この三人の中なら、確実に選ばれるのは私ね」

何となく話が脇道に逸れている三人。外野で傍観者と化した瑠華は、ある意味ハラハラしていた。

「あゝ・・・煽るようで悪いんだけど、たしか廉に彼女はいないはず・・・」

「「マジ!?!」」

「でね・・・」

「はいはい! アタシ立候補します!!」

・・・

「いや私のはな「待て待て! 私の方が、少年の彼女に相應しい!!」なんせ一つ屋根の下、一緒に暮らしてるんだぞ!」

・・・

「ち、ちょっと聞「たった二日の居候、しかも家事一切を廉くんにさせてる“私生活ダメ人間”と“経済無能の甲斐性無し”が選ばれ

るわけないわ。間違い無く、選ばれるのは私!」

...

「廉が起き」「外野は引込んで!」て!」ろ!」

ブチッ!!

「あっちゃ...」

「うるっせえぞ貴様らあ!! 人が気持ちよく寝てりゃあごちやごちやぐちやぐちや騒ぎやがってっ!! 近所迷惑も考えろボケがあ...!!」

瑠華は頭に手をあて、瑞穂・夏希・真菜の三人は、怒りMAXの廉に恐怖を覚えた。

「...たく、少しは近所付き合いしてる俺の身にもなれっただ」

「「...ごめんなさい...」」

「わかりやいいんだよ、わか...り...や...」

「少年?」

スー...スー...

「廉くん?」

「...寝てる?」

「あゝ弟って、寝てる時に騒がれたらこうなるの。でも、今日はまだマシな方だわ。一度リビングにある電化製品全て破壊した事もあるし...ほら、あの絵の裏とか、廉が壁に穴を開けたから隠してるのよ」

淡々と説明する瑠華に、

“もう少し早く言って欲しかった”

と、心の中で呟いた三人。下手にからかうのはよそう、寝てる廉の前で騒いではいけない、と教訓。特に瑞穂は居候の身、迂闊に機嫌を損ねないように気をつけようと、心に誓った。

14..廉は主役かヒロインか？

寝不足もあってか早めに眠っていた廉。目覚めたのは、まだ明け方の5時。しかし彼には二度寝の週間は無い。いそいそとベッドから起き上がり、辺りを確認・・・はて？

「俺、どうやって自分の部屋まで来たんだ？」

廉の記憶は、疲れと寝不足によって軽く眠ろうとソファで横になった所で途切れている。だが、目覚めればいつも通り、自分の部屋のベッドの上・・・。

第一、廉の部屋は2階だから、絶対に自分で起きて上まで行くならば、臃げながら記憶は残る。

だとすると、考えられるのは誰かが眠っている廉を、起こさずに部屋まで運んだ・・・という事だ。

一体誰が？

「・・・ま、いつか」

そこを深く追及しないのが、月島廉である。

ベッドから起き上がった彼は、いそいそと勉強机で“何か”の作業を始めた。

ピピッ！ピピッ！ピピッ

携帯のアラームが、彼女に朝の到来を告げる。数回の電子音がなり響き、タオルケットの中から手だけがゴソゴソと、音の出所を探し始める。

「んむう・・・」

手探りしても、無機質な音は鳴り止まない。ようやく彼女は顔を出し、視界に標的を捉えた。

ピピッ！ピ・・・

「むう・・・」

小さく呻く彼女だが、次第に意識を覚醒。スロースピードではあるが、ベッドから起き上がった。

立ち上がり大きくのび、腰を軽くひねると、パキポキと音が鳴る。パジャマは着ないようで、下着から露出した手足はスラリと細く、カーテンから覗く太陽の光が、彼女の絹肌を艶めかしく照らす。

「・・・っ痛！」

直後、彼女を襲った頭の痛み。だが、自業自得。なぜなら・・・

「うう・・・飲み過ぎたか？」

昨夜は自宅パーティーと称して、大量の料理とアルコールを消費し

ている。特にアルコール類に関しては、缶ビールを10、スーパーで買った一升の麦焼酎の3分の2をひとりで飲んでいた。二日酔いにならないほうがおかしい。

「・・・着替えるか」

とりあえず、衣装箆笥から着る物を探し始めた。

居候生活も四日を過ぎれば慣れたもので、テーブルに人数分の朝食を並べている廉。時間的に、そろそろ瑞穂を起こしにいかなければならぬ。前掛け型のエプロンを外し、階段を昇ろうと一歩足を出した所で、

「少年・・・おはよう・・・うつぷ」

額に手をあてながら、弱々しく挨拶をした瑞穂が階段を降りてきた。

「頭痛ですか？」

「・・・二日酔い」

“二日酔い!?” 廉は耳を疑った。あれだけの大食漢で、鉄の胃袋というイメージのあった瑞穂が、酒に負けた。どこと無く、瑞穂も自分と同じ人間だなあと感じる廉。

「二日酔いの薬なら、えーっと・・・あ、あった」

「少年・・・なぜ少年が二日酔いの薬を持ってるんだ？」

「姉のですって!」

と、テレビ横の薬箱から顆粒状の薬と栄養ドリンクを取り出した廉は、ソファでぐったりとしてた瑞穂に差し出した。

「この朝食は無理でしょうから、別に何か作りましょうか？」

「・・・食べる」

「は? でも二日酔いなら、胃に優しいものの方が・・・」

「痛いのは頭、胃は大丈夫だ・・・第一、少年の作ってくれた料理なら、私が食べない訳が無いだろう?」

受け取った栄養ドリンクを飲み、問題無いと言わんばかりにテーブルの席に腰を下ろした瑞穂。

「ちなみにだが、後の三人を起こした方が良いと私は思・・・」

「おはよ!・・・んゝいい匂い」

「おはよう廉くん。あら、朝から私達の分の朝食を用意してくれた

の？お姉さんうれしいわ」

「はよ！廉、コーヒー入れといて！」

と、客間から夏希・真菜・瑠華の三人がリビングにやって来た。

「おはようございます。あれ、どうしました？」

夏希と真菜は、いつもの雰囲気のに、少し戸惑っている。

「廉くん、昨日の事って覚えてる？」

「昨日？昨日は皆さんとパーティーをやった後、ソファに寝転んだ所までは覚えてますけど、後はさっぱり・・・俺、なんかしました？」

「ううん、ならいいのよ！気にしないで」

「？はぁ・・・」

何となく釈然としない廉だが、追及する事もせず、朝食を摂り始めた。

さて、今日は姉の店が休みという事もあったか、片付けを頼んだ廉は、いつもより早めに学校へと向かった。始業30分前という事もあってか、教室には、数人程度しか生徒はいない。

「はよ！今日は少し早いわね」

「おはよう佐原。起きたのが早かったからな」

早速席に着いた廉に挨拶をする咲。廉も挨拶を返しながら、他愛のない会話。

「そういやさ、今日は何の劇をするか決めるんだよね？」

「げ！思い出させるなよ・・・」

「何で？楽しみじゃない？あ、月島はなんであれヒロインだったっけ」

きつと、咲に悪気はないのだろうが、テンションの下がった廉は、机に突っ伏した状態のまま、午前中を過ごす事になる。

「で、なぜ俺は姫役なんだよ・・・」
「おいおい、佐原は浪人役だぞ。お前と大して変わらないと思うが・・・」

会議時間10分で、演目は決まった。タイトル未定ではあるものの、廉は姫役に。とはいえ、なぜ時代背景が江戸なのか、そして相変わらず納得のいかない廉は、級長の高上を一瞥しながら、東金と楽しそうに喋る咲に視線を向けた。

「毎回城を抜け出すじゃじゃ馬姫と、同じように城を抜け出しては、城下を散策する浪人姿の若殿様。そして悪者に絡まれていた姫を、偶然殿様が助けた事によって、二人の間には恋が生まれる・・・しかし、互いの素性を知らず、身分の差に苦悩する二人の結末は？・・・と、こんな感じの脚本だった」

「長々と説明ご苦労さん、しかしまあ時代劇に有りがちなベタパターンのだな」

「ベタの方が、何事にもはっきりしてわかりやすいだろう？」

“水戸〇門”みたいに。と説明する高上。既に脚本が出来上がって

いる事には突っ込まず、姫役をやらされる事には納得していないが、諦めてはいる廉だった。

15.:その頃瑞穂は？（前書き）

PV10000件突破。ありがとうございます！！

15..その頃瑞穂は？

一方の瑞穂

「でも、昨日の廉くんは怖かった・・・」

「ああ、まさかあんなに豹変するとは・・・」

「敵にはまわしたくないタイプだわ・・・」

午前中の客足も落ち着きだした頃、ROSE・GARDENの三人は、遅い昼食を摂っている最中である。話題は、昨夜の廉の事について。

「だが、要は寝ている少年の傍で騒がなければいいだけの事だ、問題無い」

「まあ昨日は瑞穂をからかう事に集中し過ぎた結果だから、確かに問題が無いといえば問題無いわね」

「ま、たしかに！」

真菜に相槌を打つ夏希。元々、二人は廉に対する恋愛感情は無い。だが、羨ましいと思ったのは事実である。

「ま、昨夜の瑞穂にはびっくりしたわ。独占欲の塊ね」

「いや、その・・・」

「まさか“少年の彼女になるのは私が相応しい”なんて言っておきながら、今更あれは嘘だった・・・なんて事は言わないよね？」

“やられた！”と気付いた瑞穂だがもう遅い。二人はニヤリと口角を吊り上げながら、無言で威圧。

「だ、だが少年は瑠華の弟だ。それに年の差もある、第一私が言い寄った所で現状が変わるかどうか・・・」

急にもじもじとし始めた瑞穂に、二人は確信した。

“完全に惚れているな”

と。

「胸も無いし色気なんて皆無の私が、果たして彼女になれるかどうか・・・」

「あら、自覚はしてるみたいね」

「なら簡単じゃない、まずは色気ね！」

完全に玩具扱いされている瑞穂だが、今は二人だけが頼り。とりあえず、色気という事は、夏希に任せる事になった。

P M 4 .. 0 0

「や、やめて下さい」

「カーット!!! うおら月島あ! 演技に身が入ってねえじゃねえかつ!!!」

「す、すみません」

放課後と同時に、廉達演劇班は台本合わせ。しかし、修羅と化した東金が、廉に罵声を浴びせている最中だった。

「ったく心が籠ってねえんだよ貴様はあ！！てめえは男じゃねえ女だ！その事を忘れんなボケェ！！！」

「し、詩織・・・そこまで言わなくても・・・」

「あんたもだ咲い！演技がぎこちねえんだよ！！気い入れろボケがあ！！！！」

止めに入った咲までもが、とぼっちりを受ける始末。その後も罵声を浴びながら、台本合わせは2時間続いた。

「疲れた・・・」

学校から帰って来た廉は、疲労に愚痴を零す。辺りは暗いが、未だ瑞穂は帰って来てないらしく、家の中は真っ暗だ。

だが、廉に休まる時間は無い。直ぐに着替え、洗濯機を稼働させながら、台本片手の料理作り。手間ではあるが、こうしないとセリフを覚えられないうえに、東金の罵声を浴びるのは目に見えている。

「あ、あなたは・・・」

「なに独り言を言ってるんだ？」

「あ、お、おかえりなさい！」

いつ頃帰って来たのか、キッチンで料理と台本の両方に格闘していた廉に、怪訝な表情で声をかけた瑞穂。廉も慌てて言葉を返す。

「お、今日は肉じゃがが！好物なんだ！！」

「あ、よかった・・・あれ？」

さりげなさを装いながら、廉に顔を近付けた瑞穂。どうやら廉も、瑞穂の雰囲気気が・・・

「つくしゅ！へ、へつくしゅん！！・・・み、瑞穂さん、化粧します？」

「あ、ああ・・・」

「ち、ちよつとすみま・・・くしゅん！！」

さすが廉、くしゃみを即座に鍋とは逆方向へ。火を止め、洗面所へダッシュ。瑞穂は訳もわからず、呆然とキッチンに立ち尽くしたまま・・・

数分後――

「すみません、昔っから化粧品の香りが苦手で」

「そ、そうか・・・すまなかった！」

「でも、なんで化粧してたんですか？」

「い、いや・・・ちよつと商談があつてな・・・ハ、ハハハ・・・」

さすがに廉の為とは言えず、どうにかごまかした瑞穂は、ぎこちな

く笑った。

「んゝ・・・瑞穂さんは化粧しなくても綺麗ですよ。まあ個人の意見ですが」

「ホントかつ!？」

「え、ええ・・・」

喰い気味の瑞穂に気圧される廉だが・・・

「ふえ・・・へ、へっ」

「ああっ、スマン!!」

瑞穂が近付いた瞬間、再び廉を襲うくしゃみ。再度、廉が洗面所に向かったのは、言うまでもない。

夕食も済み、洗濯も終えた廉は、再び台本を手にした。瑞穂は、残った肉じゃがをつまみにひとり晩酌。だが、これは夏希に教えられた“作戦その2”であった。

「しょーねーん・・・なにをしてるんだ？」

台本片手にぶつぶつ独り言を連発する廉に、瑞穂は酔ったふりして近付いた。さりげなく顔を近付ける瑞穂の顔は、廉の顔に触れそうな程。もちろん、身体も密着しかけている。

この作戦名は、題して

“酔ったふりして密着作戦！これで意識しない男はいない！！”

長いくせに薄っぺらいタイトルだ。

もちろん、真に受けた瑞穂は早速実行。結果は

「酒臭っ！！」

廉、部屋に避難。作戦は失敗に終わった・・・

「むう・・・こうなったら・・・」

作戦1・2が失敗し、残る手は一つ。瑞穂はいそいそと風呂場に向かった。

“作戦その3酔ったふりして風呂場に突入！！”

案の定、廉は風呂場にいた。磨りガラス越しに、身体を洗っているのがわかる。いざ、作戦決行！！

「あ、開かない！？」

「あゝすみません、先に入ってます！！」

内側から鍵を掛けられていた。瑞穂、撃沈・・・

「瑞穂さん、お風呂空きました・・・げ！」
「んあ？」

リビングに戻った廉が目撃したのは、本格的に悪酔いモードに突入した瑞穂の姿。一升瓶と缶ビールが散乱したテーブルに突っ伏す瑞穂の視点は定まっていない・・・

「瑞穂さん大丈夫ですか？」
「あゝ？」
「ほら、部屋に戻りますよ？」

瑞穂の手から缶ビールを取り、肩を貸す廉。しかし瑞穂の足どりがおぼつかず、バランスが保てない。ならばと、瑞穂をお姫様抱っこした廉。高身長ながら意外と軽い瑞穂に少し驚きつつも、部屋のベッドに寝かせる事に成功。

「おやすみなさ・・・い？」

自室に戻ろうとした廉だが、動けない。いつの間にか眠ってしまった瑞穂が、廉のパジャマの裾を、がっちりと掴んでいたのだ。

「ど、どうしよう？」

瑞穂の力は意外に強く、引っ張ってみても、ビクともしない。声をかけても反応が無く、スヤスヤと寝息を立てるばかりだ。

廉とて、台本合わせで罵声を浴びせられてもいるし、演技指導もやったから肉体的にも精神的にも疲労が蓄積されている。次第に、意識は薄れていった・・・

15-2..年下男子は好きですか？（前書き）

連続投稿。瑞穂視点がメイン。文は短いです。

15―2..年下男子は好きですか？

「う・・・ん？っ痛！」

目覚ましよりも早く起きた瑞穂は、二日連続でアルコールによる頭痛。だが、何となく違和感がある。

「・・・あ？」

なぜ、廉は自分の部屋で眠っているのだろうか？と、ベッド下の床で寝息を漏らす廉を発見。しかし、よくよく見れば、廉のパジャマの裾を掴む自分の手・・・

「私は何をしたんだ？」

「ううん・・・おはようございます、瑞穂さん」

瑞穂の声に反応したのか、廉は目を擦りながらゆっくりと起き上がった。

「昨日酔い潰れた瑞穂さんを部屋まで運んだら、裾を掴まれて・・・結局、ここで寝てしまったみたいですねえ・・・」

まだ意識が覚醒しきれていないのか、廉の呂律が少しおかしい。

「すまない・・・」

「いええ・・・それより、手を・・・」

「・・・ヤダ・・・」

離して欲しい・・・という廉の言葉を、瑞穂は断った。

「ほれ、こっち来い！」

「ふあ？」

立ち上がった廉のパジャマの裾をグイッと引っ張る瑞穂。寝ぼけと足元が安定していなかった為か、案外簡単に廉はベッドに倒れ込んだ。

「せっかくだ、寝て行け。まだ朝には早過ぎる」

「でも・・・」

「生憎、ここは私の部屋だ。少年に拒否権は無い」

有無を言わせず、瑞穂は廉をベッドに引きずり込む。

「ほれ、眠れ・・・」

優しく言葉をかけながら、廉の頭を撫でる瑞穂。未だ覚醒せぬ意識と、女性特有の甘い香りが、廉の意識を再び夢に戻す・・・廉にとって人生初めての二度寝は、瑞穂のベッドだった。

“眠れない・・・”

傍らで眠る廉を見つめながら、瑞穂は切れ長の瞳を更に細めた。

我ながら、大胆な事をしている自覚はある。瑞穂は自分の行動に自嘲した。

瑞穂とて21、過去に彼氏もいたし、それなりの“経験”もしている。

第一年下に興味など、瑞穂には毛頭なかった。

なら何故？

そんな事など知る訳が無い。強いて言うなら、廉の持つ“何か”が、瑞穂を強く惹きつけた。それがなんであれ、瑞穂は間違いなく、廉に心を“捕われた”のだ。出会ってまだ一週間も経たないのに、お互いの事もよく知らないのに、瑞穂は惚れたのだ。友人の弟に・・・

「やれやれ、私がこんなにも悩んでいるのに」

思わず本音を漏らす。だが、廉の耳には届かない……。カーテンから覗く月光を受け、廉の黒髪が妖しく艶めく。そっと掬えば、瑞穂の指を擦り抜けながら、サラサラと小さな音を立てた・・・

「告白は、いつになるのかね・・・」

再び口を開いて出た言葉は、宙に浮かんで静かに消えた――。

薄れゆく意識の中、未だ目覚めぬ廉の手を、瑞穂は力無くそつと握った。

16：遅い目覚めと瑞穂の告白

「う．．．ん？」

廉の意識が、ゆっくりと覚醒を始めた。アラームをかけていたはずなのに、鳴った気配も無い。カーテン越しに、陽射しが朝とは違う雰囲気醸している。

「な．．．んで？」

改めて気付いた廉。そこは自分の部屋でなく、瑞穂の．．．

「おはよう．．．少年」

不意に鼓膜を揺らす声．．．微かに、だが確かに、廉の傍から聞こえた。

「み、瑞穂さん!？」

「．．．なんだ、びっくりしたのか？自分が私のベッドで眠っていた事に」

「俺、何かしました？」

「いやいや、別に何も。強いて言うなら、私がベッドに引きずり込んだ．．．ま、安心してくれ。まだ何にもしていない．．．そうだな、これからゆっくり口説き落とす所だが」

しれっと言い放つ瑞穂。

“口説き落とす？”

瑞穂の言葉に思考が追い付かない廉。いや、そもそも瑞穂は居候という関係であって、恋愛関係とは……

「深い意味は無いさ。単に少年を好きになっただけだ、別に彼氏になつて欲しいと言つてる訳じゃない・・ま、なつて欲しいという願望はあるが」

「ち、ちよつと待って下さい！」

目覚めて早々時間が経っていない廉は、一度瑞穂を黙らせて状況と瑞穂の言葉を再確認。

目覚めたら（二度寝から起きたら）、瑞穂のベッド

↓

鳴らない目覚まし

↓

不意に聞こえた瑞穂の声に驚き、自分の隣で眠っていた瑞穂を発見

↓

瑞穂の“口説き落とす”発言

↓

追い討ちをかけた、遠回しな告白

「俺、告白されたんですね」

「理解してくれてなによりだ、まあ返事はまだ先になりそうだがな」
「……？」

「おいおい、少年にはまだ文化祭という大きなイベントがあるじゃないか・・私だって色々悩んだんだ。瑠華の弟で、年も私が四つ上だ。だがな、惚れたんだよ・・たった五日で。だから片手間で、返事をしてほしくないんだ・・」

諭すように、瑞穂は語る。言葉の端々から、瑞穂の想いは廉に伝わっていた。

「・・・わかりました」

「うん、それでいい。まだ時間はある、ゆっくり考えてくれ」

先にベッドから立ち上がった瑞穂は、勢いよくカーテンを開けた。

廉が学校へ着いたのは、午前中の授業も終盤に差し掛かった頃だった。終了のベルが鳴り、購買へ行く生徒や授業を終えた先生が廊下で入り乱れている中を、廉は摺り抜け教室へ。ちょうど昼食の時間である、いつもの面子が廉を見つけ、直ぐさま席に呼んでいる。

「食べないのか？」

「・・・やるよ」

席に座った廉だが、机に置いた弁当を開きもしない。不思議そうに尋ねた相馬に、廉は開かぬままの弁当箱を差し出した。

「何かあったのか？」

「・・・ちょっとな」

「お！遂に進展があったのか？それに今日の遅刻も関係・・・」

宮部は空気が読めない。何となく苛立ち気味の廉を察してか、高上はクイツと顎のみで合図。すると、クラスでは屈強そうな生徒が五人集まり、宮部を羽交い締め。

「えっ、なん・・・ちよっ、待つ・・・」

あゝ！！という断末魔と共に、宮部は退場。

「仮に・・・あくまでも仮の話だが、もしも年上の女性に告白されたら、お前らならどうする？」

“仮の話”とは言っているが、相馬と高上は既に察している事だし、廉とてわかっている。

「相手が誰であれ、自分の事を想ってくれているなら、嬉しくない訳がない」

「だな。それに、好きという事に年上も年下も関係無いと思う。けど、1番大事なのは、自分が相手の事をどう思ってるか？って事じゃないか？」

「相手の事を・・・」

「ああ、考えてみれば俺だって、恵美えみの最初の印象は最悪だったからな」

高上は、どちらかといえばおとなしめな女性がタイプであり、明るく派手な恵美は、むしろ苦手であった。だが、席替えで隣同士になり、会話を通して交流するうちに、外見とは異なる彼女の性格に触れ、現在はクラス公認のカップル。

「あくまでも仮の事だが、その年上の女性とは、仲良くやっているんだろ？ならば、相手をよく観る事だ。じゃなければ、相手を知る事もなく、間違った判断をする事だってある・・・まあ俺に言える事はそれだけだ」

自分の経験を踏まえた高上の言葉は、廉を納得させるには充分だったように、廉の表情も少しだけ、穏やかになっていた。

17..秋深まりて(前書き)

話は一気に一ヶ月後に飛びます・・・飛躍し過ぎですかね(苦)

17..秋深まりて

「それじゃ、行ってきます!!」

「ああ、楽しみにしてるからな!」

居候生活も一ヶ月を過ぎ、秋深まる10月の中頃。そして、瑞穂が廉に告白した日から、ちょうど一ヶ月。あの日の告白で、その後の生活に支障が出るかもしれないと、少し後悔した瑞穂だが、懸念は杞憂に終わる。

いつもと変わらない廉に拍子抜けした瑞穂だが、気構えていた無駄な力が抜けた分、また普通に廉との生活を送れている。

そんな廉は、高校生活二度目の学祭のために今日は早出。見送る瑞穂も、わざわざ店を臨時休業させ、夏希や真菜と一緒に学祭へ行く予定である。

「さてと、少年も学校へ行った事だし・・・」

手早く着替えを済ませ、自慢の愛車を発進させた瑞穂は、とあるお店に向かった。

「はよ!」

「うっす！」

「おはよう！」

教室へ着いた廉は、既に準備を始めたクラスメイトに挨拶。何時もより、声色も明るい。

「おはよう月島！」

「おう、おはよう佐原！！気合い入ってるな」

「そりゃお互い様でしょ！！！」

へへと笑う咲は、既に浪人風の衣裳を纏って気合い十分といった感じだ。

「月島、早く衣裳に着替えて！早速練習するわよ」

「東金が1番気合い入ってるな！」

「だね！」

ビシッと廉を指差す東金だが、ストーリーのメイン二人以上に、緊張。要はあがり症だった。

「おいおい、東金が緊張してどうすんだよ」

「緊張してないあんたらがおかしいわよ！」

「・・・緊張してるよ、俺は・・・」

「来るんだよね、月島の彼女さん」

「まだ彼女じゃないけどな・・・」

咲は、廉への気持ち伝えなかった。高上達と話す度に廉の口から出てくる“瑞穂”という女性の名前。そして、口にする度に柔らかなる廉の表情で、彼女は瑞穂と同じ舞台に立つ前に、己の敗北を悟った。

“告白もしない臆病者”

東金は咲に言った。咲とて、覚悟していた言葉。ショックを受けなかったといえは嘘になるが、咲は気丈に笑った。

“これでいいの”

小さい声で、咲は言った。一つの恋が散った、儂い笑顔を添えて・

通し稽古も終わり、再び制服に着替え直した廉は、教室で始業ベルを待っていた。

「どうした？」

「あゝ・・・いや、実はな・・・」

先程から落ち着きのない相馬。察した廉が声をかけた。

「んだあ？彼女でも来るのか！？」

「ああ・・・」

「「「・・・へ？」」」

宮部はおそらく冗談を言ったつもりだったのだろうが、相馬は落着きなく肯定。そして驚く三人。

「いつ頃からの付き合いなんだ？」

「まだ二週間くらい」

「そっかぁ・・・」

「高上に続いて相馬にも・・・頼む、廉は裏切らないよな？な？」

「まさか・・・うおお！！」

黙り込んだ廉。宮部は目尻に涙を溜めながら、どこかへと走り去った。

「廉の手前、どうしても言いづらくてな・・・」

「そうか、よかったじゃないか！おめでどう！！」

照れる相馬は、鼻っ柱をポリポリと掻いた。

AM 9・・・00

始業ベルが鳴り、同時にグラウンドから打ち上げられた爆竹が、学

祭開始の合図を告げた。

「えーっと、あ、いたいた！オーイ廉くん！！」

「げ！マジで店休みにしてきたんだ・・・」

「あら、一ヶ月ぶりに会えたのに、お姉さん悲しいわ・・・」

教室を出てすぐに、廉は夏希と真菜を発見。だが、肝心の瑞穂の姿がない。

「あの、瑞穂さんは・・・」

「もうすぐ来るわ」

「あーあ、せっかく私達が遊びに来てあげたのに、眼中にないത്？」

「絶対からかいに來ただけですよね？」

と、二人の相手をしていた廉の元へ、猛ダッシュしてくる影一つ・

「親友！こ、この美しいお姉様方は？」

言わずもがな、宮部^{バカ}である。

「あ、コイツは変態&バカなんで、無視してください」

「うおい！！？」

「「わかった」」

宮部、二度目の逃走

「あ、瑞穂さん！」

と、宮部が視界から消えた直後、白シャツにジーンズ姿の瑞穂が、

廉の元へやって来た。

「お？まだ女装してないのか」

「女装って言わないで下さいよ！もう・・・」

「ま、とにかく久しぶりの母校だ。少年、軽く校内デートでもしようか？」

デートと聞いて、ざわつくクラスメイト。あの冷静な高上ですら、ポカンと口を開けたまま硬直。

「それじゃ、どこに行きます？」

「否定しないのか？」

「否定してほしいんですか？」

からかうつもりが、逆に廉からからかわれた瑞穂。主導権を廉に盗られ、頬を軽く膨らました。

「むう・・・なら、任せる！」

「りょーかい！」

瑞穂をエスコートし、人込みの中へ消えて行った二人に、

「バカップルだ」

「バカップルだな」

「バカップルだね」

「バカップルだわ」

高上・相馬・夏希・真菜の四人は、同じ言葉を口にし、

「バガやろう・・・」

宮部は柱の影から廉を羨んだ。

18..不器用な花束

P M 2 .. 0 0

舞台裏で準備する廉達の中に、微妙な緊張感が漂っている。ピリピリと張り詰めた空気を作っているのが・・・

「東金・・・緊張し過ぎだって」

「だ、だってもう本番だし!!」

限度が無いのかと思う程に赤みを増す東金の顔に、廉と咲はやや呆れ顔。

「あのさ、東金が舞台に立つ訳じゃないんだ。むしろ“頑張れ!!”って送り出してくれよ」

「詩織が“あがり症”なのは昔から知ってるけど、私達に任せて! ぜったいたい、成功させるから! だからね、私達を信じて!!」

廉と咲の言葉に、黙って頷く東金。あまり緊張は解けていないようだが、表情はさっきよりも幾分か、柔らかくなっていた。

舞台の幕が下り、舞台裏で輪になった廉達。

「ほら、主役!! なんか一言!!」

「エッ! 私!?! んー・・・」

高上に推され困惑する咲だが、少しの間考えて、よし! と顔を引き

締めた。

「私達の団結力で、絶対舞台を成功させるぞーっ!!」
『オーッ!!!!!!』

気合いを入れて、いざステージへ。パンッ!と頬を叩いた廉は、幕の下りた舞台の中央に立った。

「・・・お!」

最前列の中央に陣取った瑞穂は、幕が上がった先で廉を見つけ、小さく声を漏らした。同時に、会場全体も小さくざわめく。

「あれって、本当に男子なの?」

「うっそ!マジで綺麗じゃん」

「つか、男じゃなかったら絶対惚れてるし・・・」

予想以上の反響に、まるで自分が言われているような錯覚を覚えた瑞穂は、廉を観ながら口角を緩ませ微笑んだ。

始まって10分が経過した頃から、体育館全体の雰囲気は穏やかになりはじめた。観賞する人は、まるで自分の家でテレビを観ているように、寛ぎながら。

けして悪い意味じゃない、むしろ引き込まれそうな錯覚、起承転結のはっきりとした時代劇だから、ストーリーの流れは雰囲気かわかっているのだが、和やかなシーンでは笑みが零れ、緊迫したシーンでは、声も出さずに固唾を飲む。瑞穂とて、例外では無い。ストーリーが進むにつれて、笑ったり、ハラハラしたり・・・クライマックスには、自然と涙が零れそうな程に、瑞穂は舞台に魅入っていたのだ。

幕は下りた。なのに、

止まない拍手。

舞台は、大成功だったのだ。ステージに立ったクラスメイトの一人が、安堵し笑ったり、涙を流したり。そして廉も、成功よりもやりきった充実感に頬を緩ませていた。

「少年、お疲れさん！」

「瑞穂さん！うわぁ・・・ありがとうございます！！！」

舞台袖で待っていた瑞穂は、廉に大きな花束を差し出した。が、

「本当なら生花がよかったんだが、長時間放置したら萎れるだろう？だから、ペーパークラフトやってる知り合いに教わってな・・・少し、見映えは悪いが」

「ううん、凄くうれしいです！ありがとうございます、瑞穂さん！！！」

「お、おいおい・・・」

拙いとか、見映えが悪いとか、そんな事など関係無い。瑞穂の気持ちにが廉は嬉しくて、人目を憚らずに抱き着いていた。

「やれやれ、私としては非常に嬉しいんだが・・・」

「へ？・・・あっ！」

瑞穂に言われ、状況を確認した廉。まず、瑞穂に密着している事を確認、そして自分に向けられたクラスメイトの好奇な視線・・・よって、

“ボンッ！！”と爆発音が聞こえそうな鼓動と、真っ赤に顔を染めた廉。

『お熱いことでー！！！！！！』

その場にいた全員に、冷やかされた。

その後、みんなで記念撮影をした廉。なぜか瑞穂とのツーショット撮影もあったが、重い衣装を脱ぎ、いつもの制服に着替えると、開放感で身体が軽くなった事を実感。

「さて、メイスイベントも終わった事だし、私らは帰るとするかね」
「え、もう帰っちゃうんですか？」

もう少し瑞穂に居て欲しいと思っていた廉は、ちよっぴりがっかり。

「・・・居て欲しいのか？」
「居て・・・欲しい、です」

意外と素直な廉に苦笑する瑞穂は、彼の肩を軽くポンツと叩く。

「フフッ、学校が終わったら電話してくれ。実は、先に済ませたい用事が残っているんだ」

「用事なら、仕方ないですね・・・わかりました、必ず電話します！」

「うん、待ってるぞ！」

ニコッと笑う瑞穂を見送り、廉はしばしの時間を宮部と過ごした。

19..彼の電話を待つ間・・・（前書き）

ストーリーも終盤に入り、残す話もあと僅かとなりました。ラスト
パートで頑張ります。

19…彼の電話を待つ間…

車を走らせた瑞穂は、とある喫茶店にいた。

昼もとうに過ぎ、客も疎らな喫茶店のカウンターに座る瑞穂は、若い女性マスターに話しかけた。

「一ヶ月前に、告白した・・・お前の弟に」

「ふーん」

「・・・それだけか？」

リアクションの薄さに眉をひそめる瑞穂。

「瑠華、お前の弟に告白したんだ。もう少しリアクションしたらどうだ？」

「いやいや、想定範囲内だから」

「・・・は？」

マスターの名は、月島瑠華。廉の実姉であり、瑞穂の友人である彼女は、あっけらかんと言いつつ放った。

「ま、廉って自覚は無いけどあんたみたいのがタイプだし、私としてはむしろそうなってほしかったから、万々歳だわ」

「だが、まだ返事はもらってないが？」

「んー・・・ま、大丈夫なんじゃない？」

根拠の無い瑠華の言葉。が、どちらにしても瑞穂と廉の関係に支障がでる事は無いと言いたげに、ニコツと瑠華は笑みを浮かべる。

「なんか、真剣に話してる自分が馬鹿らしくなってきた」

「そう？ コーヒーのお代わり要る？」

「貰おう」

喫茶店独特の緩やかな時間の流れ。落ち着いていく心と共に、瑞穂は電話を待った……。

電話が鳴った。瑞穂が店を出てどれくらいの時間が経ったのだろうか……。辺りは薄暮れになり、客足の途絶えた喫茶店を見渡しながら、瑠華はフツと息を吐いた。

「上手くいったのかしらね？」

独り言を呟き、カウンターに腰掛ける瑠華。

我ながら、嘘をつくのは慣れていたはずだったのだが、さすがに今回は緊張したらしい。

“ 廉はあんたみたいのがタイプだし ”

あれは、不安を隠していた瑞穂に対する優しい“嘘”。弟のタイプなど知るはずの無い瑞穂は、頭の中で言葉を反芻し、苦笑した。だが、何となく予想していた事が現実になった今、瑠華の言葉は“嘘”でも“気休め”でもなく、願望になっている。

世界中を飛び回る父親、幼い頃に他界した母親・・・ろくに両親からの愛情を知らずに育ち、成長した弟には、幸せになって欲しかった。保護者代わりの瑠華は、廉に家事のイロハを教え込み、こうして現在もひとり暮らしを頑張っている弟の姿を誇らしく、そして心配もしていた。
けど・・・

「もし、姉さんと同じ歳の彼女が出来たとしても、賛成してくれる？」

一週間前、ひとりで店に来た廉は、開口一番にそう言った。

「当たり前でしょ！」

瑠華の返答に、廉は「そっか」と笑い、覚悟を決めた表情で、

「俺、瑞穂さんの事が好きだってわかった！」

言い切った。

弟の事を心配に思う時間も、どうやら残り僅かのようなだ。そう、瑠華は確信した。

終話：夜風に返事を乗せて（前書き）

終話です・・・が、エピローグで完結させます。

終話：夜風に返事を乗せて

夕方に終わった学祭も、後片付けなどが終わった頃にはすっかり日が暮れていた。瑞穂に電話を掛けた廉は、しばし正門で待ちぼうけ・

「・・・ふう・・・」

既に学友は帰り、廉はひとりぼっち。携帯を開けては閉じ、ため息を一つ吐いた廉に、落ち着きは無い。

と、再びポケットから携帯を取り出そうとした矢先、廉を照らすクルマのライト。

「っ、眩し!？」

「少年、待たせたな!」

電話して10分、瑞穂が迎えに来た。

「すみません、遅くなって・・・」

「なに、構わんさ。ほれ、乗れ乗れ!!」

ガルウイングを開き、廉を助手席に乗せた瑞穂は車を走らせた。ただし、車は家とは逆方向へ進んでいる。瑞穂は何も言わず、廉とて声を出さない。静かな車内だが、二人を包む空気に気まずさやぎこちなさは見えず、むしろ穏やかな雰囲気、車内を流れている。

「さて、このまま行けば何処に着くかね？」

車を走らせ30分、ようやく瑞穂が口を開いた。

「海、ですね・・・」

「そうか、せっかくだから海まで行くか！」

「いいですね、行きましょう！！」

瑞穂の言葉にノリ良く賛同した廉。

瑞穂は揚々とアクセルペダルを踏み込んだ。

PM 8..22

みやじ
宮地北埠頭

さすがに十月も中頃になれば、肌に触れる風にも冷たさが混じる。

澄んだ空気は手が届きそうな程に、夜空の星を煌々と輝かせている。

「ほお・・・綺麗な星空だな」

「ですね・・・」

二人はしばし、誰もいない堤防に寝転びながら、波の音をBGMに
星空を眺めた。

互いの肩が触れそうで触れない距離。何も言わない瑞穂の手に、廉
がソッと自分の手を重ねた。

「少年？」

「・・・好きです。これからずっと、僕の傍に居て下さい・・・」

それだけ言って、重ねた掌に少し力を入れた廉。

「私を選んで、後悔はしないか？」

「しません！瑞穂さんこそ、俺を選んで後悔してませんか？」

「後悔してるなら、今頃実家に戻ってるさ。だから・・・これから
も私を傍に居させてくれ、廉！」

今度は瑞穂が、重ねた掌に力を込めた。彼の名を呼んで・・・

「もう一度言わせて欲しい・・・私は、廉が好きだ！」

「俺も、瑞穂さんが好きです！大好きです！！！」

廉は叫んだ。大声で叫んだ！人気の無い堤防で、互いの想いを伝え
あい、そして・・・

二人は恋人になった

二人は暫く目を閉じて、波音に耳を澄ましていた。無言な二人だが、重ねた掌に伝わる温もりが、言葉以上に安らぎと喜びを伝えていた。

「・・・あ！」

「どうした？」

いきなり声を出した廉に、うつすらと目を開けた瑞穂。

「瑞穂さん、車って鍵掛かってます？」

「いや、開いてるが」

瑞穂の言葉で、廉はドアを開き、学生カバンをゴソゴソと漁り始めた。

「・・・あ、あった！」

「どうしたんだ？急に」

やれやれとばかりに起き上がった瑞穂に、廉は駆け寄って小さな箱と、細長い箱を差し出した。

「・・・これは？」

「細長い箱は、瑞穂さんをイメージしたネックレスです」

と、箱を開いた廉。中には、革紐に通された小さな藍色ガラスの口

ザリオ。そのロザリオには、所々に銀砂が埋め込まれている。

「結構難しかったけど、やっと納得出来る物が出来ました！」

「このロザリオも、廉が作ったのか!？」

まるで職人技ともいえるロザリオ。精巧極める一品に、瑞穂は驚きを隠せない

「七宝焼きなんです。知り合いのおじさんから教わって作りました」
意外と広い廉の交友関係。ちなみに知り合いのおじさんとは相馬の父親であり、相馬ガラス店という工務店だ。

「ちょっと、貸して下さい」

一度瑞穂からネックレスを受け取った廉は、彼女の首筋に手を回し、ネックレスを着けた。

白色外灯にロザリオは青く輝き、銀砂が一層の光を宿した。

「ど、どうだ？」

「うん! すごく似合ってます!!」

イメージ通り・・・いや、それ以上。廉は満足に頷き、瑞穂もニコッと微笑んだ。

「そしてこれは、僕から瑞穂さんに贈る、もう一つのプレゼントです!」

「これは・・・指輪だ」

瑞穂の言う通り、廉が開けた小さな箱の中には、銀の土台に白色の

丸いタイガーアイ（天然石）が組み込まれた指輪が入っていた。そっと指輪を手にした瑞穂の目に、指輪に刻まれた文字が焼き付いた。

“ F o r M I Z U H O ”

“ 瑞穂さんへ ” と刻まれた指輪。

「馬鹿者・・・お前はホントに・・・」

小さく呟いた瑞穂・・・その瞳には、うつすらと浮かぶ涙が光る。

「ああもう・・・最後に私まで泣かせやがって・・・ホントに、最高だ！」

「よかった！」

目を擦る瑞穂は、安堵の笑みを浮かべた廉を抱きしめた。

「瑞穂さん、起きてくださーい!!」
「むう・・・もう少し」

普段と変わらぬ朝。普段と変わらぬ瑞穂と廉・・・

「瑞穂さーん？」
「・・・」
「しょうがないなあ」

そんな二人は、

「愛してる・・・」
「!?!?!」

恋人になりました。

おしまい

エピソード：居候から同棲へ（前書き）

エピソードは、瑞穂視点です。

エピソード：居候から同棲へ

ジリリリリー！！

「むう・・・」

目覚ましのけたたましいアラーム音が部屋中に響き渡り、私の意識も現実へと引き揚げられる。

ジリリリリー！！ジリリ（ガチャン）・・・

全く、私がゆったり惰眠を貪っている最中だというのに、不粋な奴（目覚まし）だ。どうせなら、愛しい少年の声で起きたいものだな・・・

コンコン！

「瑞穂さん！おはようございます！！」

噂をすれば・・・

「うん、おはよう！」

「おはようございます！朝ごはん出来てますよ」

「・・・」

「どうかしました？先にリビング戻ってますね」

さっさとリビングへ下りていった少年。

今、私の格好は黒の下着のみ。我ながら意外とセクシーな感じだったのだが・・・

「むう・・・」

少しムカツク。

なんの態度もそぶりも見せない少年に不満を抱きつつ、私は着替えを始めた。

今日は土曜日、店は休み。ゆったりと朝食を摂った後は、二人でまったりタイム・・・という訳にもいかず、少年は洗濯に掃除をテキパキと熟している。

「よし、終わった!」

先に掃除を済ませ、最後の洗濯物を干し終えた少年が、リビングへと入ってきた。

「ヒマですね・・・」

「ヒマだな・・・」

ソファで寛ぎながら、ダラける私と少年。ヒマではあるが、どこかへ行こうという気にもなれない。

無駄に時間が過ぎて行く・・・と、思った矢先

「・・・おっ！」

「どうした？」

チラシに目を配っていた少年は、あるチラシを手に取り小さく声を出した。

「いつも行ってるスーパーが、10周年で特別大売り出しですって！」

「ほお・・・どれどれ・・・おっ、今日は特に魚が安いな！」

私は肉も好きだが魚も好きだ。刺身・煮付け・焼き物・揚げ物・・・なんでも好物！

「行くか！」

「大丈夫ですか？」

「なにが？」

「・・・いや、口で説明するより体験してもらったほうがいいかな？」

「？」

体験ってなんだ？

まあとにかく、開店まで時間もないし、行くか！！

「・・・う・・・」

「大丈夫ですか？」

「な、なるほど・・・少年の言いたい事がよくわかった・・・」

開店10分前に着いた私達だが、すでに入り口には先客が多数。しかもみんな、運動靴にジャージやトレーナーの、動きやすい格好だ。少年も例に漏れず、上下黒のトレーニングウェア姿。入念に、準備運動までする始末。

「危ないから、後から店に入って来て下さいね！」

「？」

なぜ注意事項？少年の意味する事がわからず、何となく少年の隣にいた私。

少年は少年で、困惑気味に私を見ていたが、隣のオッサンに話しかけられ、開店数分まで話し込んでいた。そして・・・

「おはようございまーす！！」

の声で、勢いよく開かれたドア。そしてなだれ込む客。

まるで障害物競争でもするように、全員が各々の目的地まで猛ダッシュ！気付けば隣にいた少年もいない。捜そうにも、後ろから波のようにぐいぐい押されっぱなしで、自分の力では思うように進めない。

どうにか人込みの少ない場所を発見し、避難。そこは売り出しとはあまり関係のない菓子コーナーだ。

「少年は・・・あ、いた！！」

背伸びして辺りを窺えば、激戦区と化した鮮魚コーナーで奮起する少年を発見。カゴの中には、大きな鰯ブリを一尾丸ごとキープ。しかし、他の魚を手に行っているが、カゴへ入れる気配は無い。

と、そこへ人込みを掻き分けてやって来たのは、開店前に少年と話し込んでいたオッサン。

よく見れば、オッサンは肉を渡し、少年は手に持っている魚介類を渡している。物々交換か？

「あ、いた！」

少年は私を見つけると、人の波を摺り抜けて私の元へ。

「お待たせしました！結構いい物ゲットです！！」

「ほお！いいサイズの鰯だな・・・そういえば、さっきオッサンと交換したのは？」

「黒毛和牛のサーロインブロックです。あの人は小料理屋の大將で、この店の常連さんですよ。鮮魚と精肉って離れてるから、たまにこうやって分担するんですよ！」

ほお、なるほどね。

「しかしでかい肉だな・・・は？グラム百円！？」

重量2306グラム。金額2306円・・・つまり1グラム1円。
安っ！！

「滅多に無いですよ。普段なら倍以上しますから」

さすが10周年・・・恐るべし。というより、人込みが凄いな。

という事があり、私は初めて人込みで少し酔った。隣でけろっとしてる少年は、心配そうに私を気遣っている。

「ん、もう大丈夫だ！」

「・・・よかったあ」

本来なら、もう少し少年の看護に甘えたいのだが、まだスーパーの外のベンチに座っている。あまり長居も不要だし、そろそろ家に帰るかね。

ま、とりあえず一度家に帰り、今日買った食品を冷蔵庫へ。そして少年は、キッチン下の棚から大きな出刃包丁を取り出した。

「お、おい、大丈夫かね？」

「大丈夫ですよ、慣れてますから！」

と、大きな鰯の頭後ろに出刃を振り下ろした。

「お、おお！」

見学中の私は、出刃一本で鮮やかに鰯を捌く少年の腕に、驚きと感動。

ものの数分で、綺麗な身がまな板に二つ並んだ。

「ん、刺身はどれくらい食べます？」

「そうだな・・・ここからここまで」

と、指で大体の量を決めた私。少年は背と腹の間に二本の切れ込みを入れ、丁寧な皮を剥ぐ。すると、あっという間にスーパで並んでいるお刺身用ブロックに早変わり。

「少し味見します？」

「ん、よろしく！」

丁寧にブロックに刃を入れ、両サイドの切れっ端を頂戴した私。

「美味い！」

「じゃ、残りは夕食までお預けです」

と、大皿に花のように刺身を盛りつけた少年は、ラップして冷蔵庫へ。

残った半身は、適当な大きさに揃え、塩で味付け。他にぶつ切りにしたり中骨を適度に切断してグリルで焼いたり、色んな事をして

いる。

今日の夕食が楽しみだ！

「さてと、後は頭か」

「頭？食えるのか！？」

「兜焼きとかあら煮で。なかなか美味しいですよ」

ほほお、美味しいなら是非とも食べてみた・・・い？

「お、おい、危ないぞっ！」

「え？ああ・・・」

あろう事か、少年は鰯の頭をまな板に立て、力で半分切断していき。見てる方がハラハラする！

ダンッ！！

「よし、終わり！」

「ふう・・・」

真っ二つになった頭を手でニコッと微笑む少年だが、図的にグロい・・・

昼食に舌鼓を打った後は、再びまったりタイム。

食後にソファでコーヒーを飲む私は、流し台で食器を洗う少年に目を配る。

何となくだが、この何気ない時間が永遠に続いて欲しいと思う。二人だけの時間を・・・

食器を洗い終えた少年が、ソファにやってきた。

そして次第にうつらうつらと、瞼が重くなっているようで、時折首がカクツと下を向く。

「おいおい眠いのか？」

「みたいです。ちょっと部屋で寝て来ますね」

「まあ待て、ほれ、こっち来い！」

私は自分の座るソファに少年を呼ぶ。眠気が強いのか、少年も素直に私の隣に座る。

「ほれ、横になれ！枕もある！」

「え？でも・・・」

「いいから！」

と、半ば強引に少年を横にした私は、自分の膝上に少年の頭を乗せる。

「どうかね？」

「・・・気持ち良い」

「そうかそうか！なら、ゆっくり寝ろ」

目を閉じた少年の髪を優しく撫でながら、のんびりと時間を潰す私

は、至福の時に意識を落とした・・・

「・・・ん・・・」

知らぬ間に私も寝入ってたようで、リビングには西日が射し込んでいる。少年はまだ起きておらず、私のひざ枕でスヤスヤと眠っている。

再び髪を優しく撫でれば、気が付いたのか、寝ぼけ眼を擦りながら起きる少年・・・

「おや、起こしてしまったかね？」

「・・・？」

「私のひざ枕は気持ち良かったか？」

「・・・極上でした」

お粗末様。

ゆっくりと起き上がった少年は、時刻確認後、手早く洗濯物を取り込んだ。

あ、言い忘れてたが、洗濯物に関しては私が粘り強い交渉で、私の分も少年が洗っている。

恥ずかしいのか？ いやいや、たかが布きれ、別に裸を見られる訳じゃないから心配無用！

「自分の分は畳んで下さいね！」

「はい」

まあ畳む位は私もできる。テキパキと乾いた洗濯物を畳む少年……主夫だ。

「それが終わったら、夕食にしましょうね！」

「おう！」

夕食と聞けば、俄然張り切る私。

居候生活も2ヶ月目に突入し、この家に帰る事が当たり前になった今、少年の存在はとても大きく、とても大切……

「どうしました？」

「ん、いや、居候生活もだいぶ慣れたなあ……と思ってな」

振り返った少年……そして切断された魚の頭を片手の疑問系は、変なグロさだよ。

「ん……その表現は間違ってますん？」

「いやいや、居候だろう？結構マシにはなったと思うが……」

「やっぱり間違ってる！瑞穂さんは居候生活してるんじゃないですよ？」

おいおい、気でも狂ったかね？

口を尖らせる少年は、ビシッと私を指指した……指というより出刃包丁で。

「瑞穂さんは居候してるんじゃないくて、同棲してるんですよ！」

「・・・お？」

「だって恋人ですよ、居候はおかしい！」

「・・・おお！確かに！だが少年、凄くいい事を言ってる少年と、手に持ってる魚の頭のグロさがアンバランスだ」

「・・・あ、ホントだ」

アハハツと笑い、テキパキ調理にかかる少年の背中を見ながら、気付かない内に張っていた力が自然と抜けていく・・・

居候から同棲か・・・。まだまだ恋人としての進展には時間がかかりそうだが、今はこの時間を、二人でゆっくり過ごしたいものだな・・・

「できましたよ、食べましょう！」

「うん、いつもありがとうな、廉！」

「・・・え？今、名前・・・」

恋人同士なのに、いつまでも少年呼ばわりする訳ないだろう？ただ恥ずかしくて、名前で呼ばなかっただけさ。何か言いた気な少年を余所に、私はあら煮るをパクリ！・・・うん、美味い！！

こんな私と少年の一日。平凡だけど、幸せだ！

おしまい！

エピソード：居候から同棲へ（後書き）

完結しました！この作品のモデルになった友人いわく、

「私ってこんな感じ？」

と言われましたが、

「まんまこんな感じよ！」と、周りから突っ込まれてました（笑）

まずは、友人に感謝！！そして、最後までお付き合い下さった読者の皆様に感謝！！

今後はまだ未定ですが、短編でも書こうかなあ・・・。

などと思う私ですが、次の作品まで、しばしのお別れ！より良い作品を書き上げるべく、日々精進！

長々と後書きまでお付き合い下さって、ホントにありがとうございます！
ました！！そして、これからもよろしくお願いします！

真稀

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6207n/>

姉さま気質な居候？

2010年10月17日14時19分発行